

昨年の史學考古學地理學界

史學界

史學一般史觀に關するものには著書としては「階級及第三史觀」(高田保馬)あり、第三史觀とは唯心史觀經濟史觀に對する社界學的史觀の謂にして、デュルクム、ブルグレ、ジムメルに負ふところあるも又著者の獨自性あり、階級篇に於て階級の本質を吟味し次に階級の構成要素たる社界的勢力を仔細に分析し第三史觀篇に於て階級の變動の筋道を明にせむとして居る。雜誌に發表されしものには「ポリビオスの史風」(原隨園、史林)あり、ポリビオスはローマ帝政の産みたる卓然たる世界史家たりしを論じ、彼の史觀は史實は因果の關係に於て把握せらるべく尙この自然主義的解釋の不可能な所には運命の力を認め、併も是を合理的自然秩序に解釋し歴史の動く姿を輪廻といふ歴史哲學的思想を以て解釋して居る。歴史認識に關するものには「ランケの歴史認識の一面に就いて」

(舟田三郎、史學)あり、ランケの歴史研究の動機は宗教的なりしも研究法は科學的にして、その歴史認識は、普遍と特殊との相關に於ける世界史的認識であつてその歴史認識の最後の目的は史的現象のみならず史的實在をも認識し、世界史のうちに神を認識せんとするにあつた、

「歴史に於ける實と眞(平泉澄、史學雜誌)に於ては實と眞との意義を區別し、實のみの歴史は死せるものであり歴史が生命あるものたらんには眞なるものならざるべからず眞の史家は人間通であり操持ある理想家崇高なる道徳家たらざるべからず主張す。眞に關して價值哲學の觀點より論じたものに「新と眞(北吟吉、國學院雜誌)あり。史學と經濟學との接觸に關するものに「歴史家の經濟學の領域侵入」(高橋誠一郎、史學)あり、理論と事實との間に矛盾を有つた古典派經濟學に對して起り、經濟學界に優勢を占めつゝある獨壇を中心とする史的經濟學派につき詳論し、その反動現象とも見らるべき理論と事實との衝突なき「純粹經濟學」存在の意義を述べて居る。歴史區分法に關するものに「西歐羅巴の史的生活に於ける週期律」(フオゲール原著・菅原憲抄譯・史林)あり、從

來の形式的、外的區分法を退けてそれを歴史そのもの、うちに見出さんご試み、西歐史のうちに三百年の週期律あるを指摘し、これを區分規準ごなし、且つ理論的基礎を與へて居る。史料方面に關するものには「歐米の古文書館」(三浦周行、同誌)がある、筆者が嘗て歴訪された歐米諸國の古文書館の結構より古文書の蒐集整理保存利用古文書館員の學識教養古文書館の事業等に關する精細なる紹介である猶ほ「史料ごしての傳説」(柳田國男、史學)は從來の史家が傳説の一部を史實ごして採録するか全々空想の所産ごしてその史的價値を否定せるに對して、傳説を日本人の生活の大部分を占むる思想ご感情ごの豊富なる史料ご考へ、その失はれんごしつゝあるを遺憾ごし、それらを拾ひ集めて解釋して居る。「中原」

の繁盛ごなつた。西教篇、典籍篇、藝術篇に分ちて「足利學校の盛時ご西教宣傳」以下二十八篇を收めた「南蠻廣記」(新村出) 洋學編、海棧篇、鎖國篇、情趣篇に分ちて「足利時代に於ける日本ご南國ごの關係」以下二十七篇を輯めた「續南蠻廣記」(同人)さては典籍に關する研究を纏めた「典籍叢談」(同人)の續刊に讀書子を驚かし對外關係洋學關係典籍の研究に關する幾多の編著が出版された事はたしかに一つの歡喜であつた。次に先年物故した八代國治氏の論著より「長講堂領の研究」「伏見御領の研究」「七條院御領考」「請所の研究」以下二十二篇を選択編纂した「國史叢說」が刊行された事はまた記錄さるべく「鎌倉時代の研究」が發行されて新に「御家人生活」以下六篇の新しい論考を併收した事も亦その一に數へらるべきであらう。かくて一般史の方面から觀察するご、鎌倉時代の文化に就いて「西田直二郎、鎌倉時代の研究」は此時代の封建制度の精神は恩に對する義理の感情を主思想ごしそこには古代の民族制度時代の生活ご精神ごが蘇つて來たものご言へる、又人間崇拜が新に高つて、個人性の發展に關係を及ぼし此時代の美術の代表である繪卷物や竹

像畫も個人性の表現を最も必要としたと説いて居る。

「豊臣時代史」(田中義成)は一世の雄秀吉を中心として其時代を記せるものなるが、賤ヶ嶽合戦を以て秀吉が創業に於ける三大戦の随一とし、小牧役は家康が名を信雄庇護に假りて秀吉に衝突を試みたもので胸中に成算あつての事であるから、兩雄の合同したもので且つ分裂したものである所以を説き秀吉の政策は信長のそれを踏襲せるものなるに拘らず對寺院政策のみは全く反對の方針に出でしかも敢て其の痕跡を現はさなかつたと論じ、天正日記を疑ひ、それによる家康の關東入國に關する説を排して居る。「後北條氏」一向宗(渡邊世祐、史學雜誌)との關係は信立と一向宗との關係によつて左右されたもので信立には鎌倉長延寺の實了師慶が隨從して畫策し奔走して宗徒との聯絡を計つた。上杉景虎の關東侵入に際して氏康は信立と聯盟し加越の一揆を依頼するために宗門與隆を約し永祿十二年氏康景虎の盟約成り信立の小田原攻撃となつたので宗徒は分國內を追却せられたが次で氏政立ちて信立と結んでから景虎を壓迫せしめんがために宗徒に對する態度は緩和されたのであると其の由來を細

説して居る。「南北朝の講和は如何にして成立したか」(三

浦周行、中央史壇)はその經路を物語り合體の條件は神器の御歸座が護國の儀たるべき事、爾後兩朝は迭立たるべき事、諸國々衛領は後龜山天皇の御領たり長講堂領は又持明院統の御領たるべき事であつたがその中眞に實行されたのは第一の條件だけであつたと説いてゐる。次に「後柏原天皇の御即位式に關する研究」(淺野長武、東洋史論叢)は永正三年二月に實隆が内大臣に昇進した事は彼家公卿が徒らに自己の地位を高めてせめて物質上の打撃を慰めんとした一つの現はれであると共に天皇の思召の中には、その昇任によつて即位式の速行を希望された分子があつたこと本願寺が御即位用途を奉獻した事は認むるも准門跡に列せられたのは其後永祿二年十二月光佐の時であること斷じ更に大内北條今川朝倉毛利以下が御即位用途の奉獻をして皇室に忠誠を盡すに至つた徑路を論じたが「毛利大膳大夫に就て」(伊木壽一、中央史壇)説き普通には永祿三年正月正親町天皇即位の時元就その資用を獻金したるために大膳大夫を賜つたこと説くがそれは非であつて元就は陸奥守にはなつたけれども大膳大夫にはなら

す、彼の長子隆元が此時敬感に依つて大膳大夫を賜つたのであるとしてみる。

第二に人物論の方面は非常に賑かであつた。先づ「人物論叢」(辻善之助)が「聖徳太子」「傳教大師と其時代」「平清盛論」「源頼朝について」「明慧上人」「歴史上より觀たる親鸞」「花園天皇」「織田信長側面觀」「豊田秀吉の片影」「徳川家康」「片桐且元論」「竹内式部と其時代」等十四篇を集めてあり就中「柳澤吉保の一面」(辻善之助、史林)では、彼が非難の的となつて居るのは貨幣の改鑄と生類憐みの令とであるが、前者に就いては責任がなく寶永の時には多少の責任があらうけれども白石の批評は當つて居ない後者は綱吉の意中から出たのであつて吉保は其命を忠實に奉じたのである、彼は好佞な邪臣ではないがさりとて大手腕のあつた政治家でもなく一意將軍の意に従はんことを努めたのであると斷じ彼の禪學修養方面に於ける精神生活を観察したものである。それについて世人を曠はしたものは義經を主題とせる論争で、それは前年發表せられたる「成吉思汗は源義經也」(小谷部鈞)との説に對して中

行して之に反對した、先づ「成吉思汗は源義經也」といふ説を讀みて義經の最後に關する所見を陳ぶ(大森金五郎)と題して吾妻鏡の如き比較的信すべき史料に義經の衣川に於ける最後が明記されて居る以上之に向つて異説を唱へんとするには餘程の根據を必要とするといひ「笹龍膽は清和源氏の家紋にあらず」(沼田頼輔)して村上源氏より出た公家を使用したのを誤つたものであらうとして小谷部氏の紋章よりする説を駁し「先づ人物の相違」(臨風生)より見るも「義經と成吉思汗とは全く別人なり」(中村久四郎)と斷じて居る。次は昨年が後宇多法皇六百年の御忌に相當した爲めに「後宇多法皇御忌記念號」(密宗學報)が發行され「後宇多天皇の御信仰について」(猪熊信男)述べ天皇が佛門に入らせられた事は後嵯峨天皇及び父皇龜山天皇崇佛の御感化であるとしその近因は遊義門院の崩去であらうと忖度し眞言宗に歸依し給うたのは御理想を弘法大師に置き寛平法皇に嗣ぐ御意であつたからだとし大通寺の弘法大師像が法皇の御宸畫にして御宸讚である事を注意した、また「後宇多法皇御出家の動機」(淺井義明)として内には武門政治に禍せられた皇位繼承の

問題あり外には一國存亡の國難ありて内政に對する御不満も外患に對する御心勞も諸佛神明の如實の加護に對する御信仰のためである。こし遊藝門院の崩去は單に其の時機を與へたものである。こ観た説もある。「後宇多法皇の教王常住院」(橋川正、兒童と宗教)を説き龜山殿にあつたのを大覺寺の境内に移して兩三の莊園を施入し慈氏下生の曉までの存續を起請し行學必双を本學の本質とせられたもので此時代に於ける宗教々育史上の一異彩である。こしたものである。次に新井白石が前々年その生誕二百五十年に相當した、めに、白石に關する研究がまた纏つた中心を有するものこなつた、先づ「白石の一遺聞」(内藤虎次郎、歴史と地理)は白石が當時の氣運であつた科學の研究に力を用ゐるそれを歴史の方面に應用しようとした所が最も偉いとして白石の態度を稱揚しまた朝鮮使節と筆談するまでに相手を感じさせやうとこし白石詩草を前以て出版させ對馬の雨森芳洲の手許に届けて置いて朝鮮正副使に先づ渡して貰ひ彼の巧みなる詩材で相手を壓迫して置いて後に江戸で出會つてあの詩の作者は自分だこ出たのである。こし「新井白石の貨幣論」(本庄榮治郎、同

誌)を論究し彼は貨幣の品位と物價との關係を認めず且つ惡貨も法律の力によりて流通せしめ得べしと信ぜるに拘らずなほ貨幣の品位を慶長の古に復せんとするものであるがそれは一種の信仰又は復古的思想から出たもので確乎たる經濟上の理由に至つては未だ明言して居ない。こ論じたもの等二三注意すべきものがないではなかつた。

次の中心は幕末維新史であつた。「幕末志士の暴行と其の下手人」(井野邊茂雄、國學院雜誌)の中に文久二年七月廿日島田左近が暗殺されたを手始めとして浪士本間精一郎九條家諸大夫宇野立藩頭目明文吉京都町奉行細與力渡邊金三郎格森係六大河原重藏多田帶刀が所謂天誅を加へられた事蹟や村山加壽江平野屋壽三郎煎餅屋半兵衛を生晒した事を述べ同志間の軋轢によりて暗殺さるゝものも多かつたが又佐幕派たる堂上を排斥せんとした志士運動と密接の關係を有した事を明かにし文久二年四月廿三日の夜に起つた寺田屋事變の中心人物であり且つ此事變の生んだ最も不幸な犠牲者の一人である「田中河内介」(同人、同誌)の一生を紹介し彼が早くより尊王心を抱き舉兵討幕の策を按じ志士の間で重きをなす材幹を備へた

けれども權謀を以て事を遂げようとしたのは遺憾な點である。もし同年五月一日瀬戸内海航行中心なき薩人の刃に斃れ、不祀の鬼となつたのを吊ひ同じく文久三年八月十五日の夜暴徒のために小梅村の自邸に刺殺され翌日日本橋二葉町の荷揚場に斷罪狀を掲げられた「鈴木重胤の眞人物」(樹下快淳、明治聖德學會紀要)を論じ其信仰、國體觀、學問の三方面より觀察して幕府の命を受けて廢帝の調査に従事し幕府當局の奸計に加擔したる事なしと言ひ遭難の原因は恐らく當時勸王浪士の誤解を受けて其毒刃に倒れたるか學敵のために斬られたかの何れかならんとして其冤を雪いたものがあり轉じて「徳川慶喜公の大政奉還に就きて」(藤井甚太郎、中央史壇) 研究し慶應三年十月十四日の公表文を示し公の思想中に朝廷尊崇を主とする水戸家の武家政治觀のあつた事を指摘し且つ公は家茂の後を繼いださきも徳川氏は相續するが將軍職は繼がぬと言はれた事等より大政奉還は公自身の決心によりて決定せられたものであらうが淀藩主稻葉美濃守松山藩主板倉伊賀守永井玄蕃頭平山圖書頭原市之進等に相談せられたものと思ふと推定して居る。「維新前後に於ける立憲思想」

(尾佐竹猛)は幕末米艦渡來に際して幕府が廣く意見を徵したのは輿論政治の端緒である。ここから歐米に於ける議會制度の我國に紹介され、我海外派遣の使節等が彼國の議會を傍聽したことを説き次で議會制度が實際運動として擡頭し來つた経路として幕府及び諸藩の議會論を列擧し列藩會議論が慶喜の大政奉還後にも起つて五箇條の御誓文の萬機公論も其意味で起草され更に其形式を議會化した公議所、集議院が廢藩置縣後迄も存続した。ここから地方議會の發達で結ばれて居るが、其間新聞雜誌の勃興五箇條の御誓文、官吏公選、會津陣中の憲政論等についても精緻にして的確なる記述が加へられ行文は流暢で一種の魅力に富んで居り加ふるに當時の貴重な圖版を隨所に挿入して讀者を倦ましめない近來の快著である。此命題の一部をなして居る「明治初年の地方官會議」(藤井甚太郎、史林)について説明し、地方官會議は衆議院の下稽古とも言ふべきものであつて、その中に地方民會の事が御下問になつて居るが次の十一年の會議に府縣會規則として可決せられ一部の士をして非常に心痛せしめ佛朗西革命の時代に近しこまで言はれたものである、次の

十三年の會議では二十五案が提出されたが就中府縣會議員選舉法の改定と區町村會布告案が主なるものである事を指摘し日本民權史上重要な意義あるものであること結んで居る。其他「川中島の戰爭は果して何時か」(渡邊世祐中央史壇)は妙法寺記を基礎として弘治元年七月十九日の川中島の對戰同三年四月の對抗永祿四年九月十日黎明の謙信突撃を述べ信玄の作戰は常に謙信を壓したかの觀があり外交上政治上の手腕は確かに謙信の上にあるが謙信は眞面目で律義で大義名分を重んずる名將であつたこと稱へ謙信をして終に越後を離れて他國を遠征する能はざらしめたその「信玄の遺骸の所在」(同人、同誌)は惠林寺にあること斷定したものや「洞ヶ嶺と筒井順慶」(同人、同誌)を題し、彼は初めは光秀に志を寄せたけれども後には自衛の策を樹てやがては秀吉と結ばんごし依然として郡山に大兵を擁して居つた、たゞその態度は曖昧で不徹底ではあるが天下分目の戰には斯る例は多い事であることして彼に同情したのは何れも武士を主體としたもので、從來の誤を正した點に於て同一の項に收め記さるべきであらう。「近世史學史上に於ける栗田寛先生」(三浦周行、

歴史と地理)の地位を論じ近世の史風として國史の編纂史料の精選、史體を支那の紀傳體や編年體に取りて系統立てる歴史を編纂する事、事實の記述中に褒貶の意を寓し大義名分を明かにする事を挙げ、大日本史はこの四大特徴の表現であり、それは栗田先生によつて完成せられた世界に比類なき長期の編纂事業の結末をつけられたのである事を力説したものと及び從來あまり其の事蹟を知られなかつた「藏書家白藤」として知られたる書物奉行鈴木岩次郎成恭の事蹟」(森潤三郎、史學)を調査し、白藤は鈴木成義の子であつて天守番、學問所勤番組頭を経て書物奉行となつたが間もなく御役御免となつた、其の理由として考へらるゝ事は恐らく紅葉山文庫の祕書を謄寫したためであらうと察すると言ひ、彼の性行逸事を物語りその編纂及び藏書を列舉してあるは正に愛書家の見落す事の出来ない苦心の作であり、精神方面の恩惠者として並べ舉げて置きたい。人物の最後に來るのは中央史壇の別の企てであつて「疑問の國史」を題する特輯號を出して「疑問の天皇」(本多辰次郎「安徳天皇御長壽説」)(衣笠健雄)「後光明天皇崩御に伴ふ感説」(阪東二郎)「頼朝薨去に

關する異聞の比判「龍窟」楠公父子櫻井宿剋別の眞僞に就て「西岡虎之助」豊臣秀頼の薩摩落説に就いて「高柳光壽」以下の數篇を收めたが、その中で「蒲生氏郷の毒殺説について」(花見朔己)三成が計略を以て彼を毒殺したとする説の信すべからざる事を論じたに對し「蒲生氏郷の毒殺説に就て」(深澤多市、同誌)を題して前者を補ひ全く病死であつたが時日の移るに共に周圍の事情から毒殺説が醜醸され南禪寺の靈三和尚もふに彼の畫像贊に置鳩毒の句を書いたものであると言つて居るものがある。

第三は都市を中心とした研究であつてその一は大阪である。「大阪文化史」(大阪毎日新聞社編)は大阪市が隣接町村東西兩成郡を編入した記念のために企てられた大阪文化史講演會の講演集であるが「難波京と其前後」(喜田貞吉)に於て上代より平城遷都の頃までの難波の興亡盛衰を説明し「中世の大阪」(三浦周行)は主として石山本願寺の門前時代及び秀吉時代より豊氏滅亡後松平氏の居城たりし城下町時代を説き豊氏滅亡後幕府が町民に充分な自治を許したのは一面市民の感情を融和せん計つた高等政策であつたがために町人時代を現出して近世大阪の

經濟的發展の原因となつたと言ひ降りて「近世文化と大阪」(西田直二郎)は家康の近世的封建精神に對する秀吉の自由精神を繼承したものでそこに町人精神が發達した事を指摘し「近世史に於ける大阪の地位」(黒板勝美)は市民の努力によりて封建制度打破の原動力となつた次第を述べて前者とほぼ一致した見解を示し「日本經濟史上の大阪」(幸田成友)に於て天下の台所たる大阪町人の武家に對する經濟的の權威を各方面より講述したるは「西洋文化と大阪」(新村出)に於て泰西學術の影響を見、基督敎の弘通を説いたものや「大阪と國文學」(上田萬年)大阪の町人學者富永仲基(内藤虎次郎)「最大の淨瑠璃作者竹田出雲」(藤村作)と相對比して此の經濟都市の精神的文化の方面を觀て以て大阪が一種の底力を有するものなる所以を明かにした。それと併せ見るべきものに明治維新に際して大阪の富豪が御用金を獻納した事蹟を述べた、「明治時代商人の第一歩」(藤井甚太郎、歴史地理)や一八六九年(明治二年)二月本邦駐劄英國公使の横濱より伯爵クラレンドンに宛てた報告書の一部を譯出した「明治元年の兵庫及び大阪」(幸田成友、同誌)がある「天文日記」

大阪（橋川正、史林）は大阪本願寺を中心とした六町のあ
る事を注意し堀を繞らして城郭の體裁を備へた一廓が本
願寺に附屬して生じ六町には門があつて一定の時刻に開

閉し其の鍵は始めは寺で後には町で保管したのみならず
六町には番屋があつて寺内警備の任に當つたといつて居
る。次は堺市を中心にしたものに「堺市史講演集」があ
る。この中に於て「堺港と歐洲人（新村出）との關係をこ
き堺市に於ける基督教布教の状態を詳述し江戸時代の文
書に堺が南蠻船渡來地として反映せる事を示し、また「歴
史上の大堺」（三浦周行）を説き南朝と堺との關係、對明
貿易と堺をこき更に轉じて堺市の自治體、堺の文化、堺
の繁榮を論究したものがあり別に「日本文化の過程」（原
勝郎、文科學術講演集）の中にも特に堺港のために一項を
設けて恰も歐洲中世の都市の如く中立地帯として自治制
の發達した事に言及して居る。又「中世の商人と海賊衆」
（相田二郎、歴史地理）の關係を論じた中にも堺津の商人
組屋五郎右衛門を中心とした堺商人の活動を物語り九州
の南部までも往來し九州地方の産物及び九州の諸津に支
那より輸入した品物を上方に轉送したものでその道中の

保護のために海賊衆村上氏の力を借りて航行の安全を期
した事を記して居るものがある。

吾人はこゝに項を改めて法制史の方面を記述する時機
となつた。その第一に記録すべきは「續法制史の研究」
（三浦周行）の發行であつて前年度中に於ける國史界の最
大收穫と稱しても敢て溢美ではあるまい、何しろ菊版千
五百餘頁といふ大冊に「法制史概論」「法制史講義」「公家
制度の發達」「明法家と檢非違使」「武家制度の發達」「貞永
式目」「鎌倉時代の土地制度」「鎌倉時代の家族制度」「寺院
法史料」「江戸幕府の朝廷に對する法制」「自治制度の發
達」「田區改良法」以下二十九篇を採擇收載されて居るも
ので法制史としては總論より公家法、武家法の各編に亘
り或は制度に或は史料に或は史論に古代より近世に至る
各種の項目に通じた論著を以て満たされて居り特に一の
法制も突如として制定さるゝものに非ずしてその制定を
見るまでには必ずやそこに歴史的原因のある事を示し制
定されたる法制と國民生活の實際との接觸を觀察された
事は本書の特色の隨一であり且つ單に從來發表した論著
を收録したのではなく筐底に藏せられた諸長編を收めて

首尾を全うした點は近時發行せらるゝ著述の通弊を破つたるものとして吾人が少からぬ敬意を表するところである。「古代日本の末子相續制度に就いて」(白鳥清、東洋史論叢)は宋書梁書南史等の倭國傳に見ゆる倭王讚以下武迄を國史の履仲天皇以下雄略天皇までに推定し三四世紀から五六世紀に亘つての皇位相續は漢史の記載からして兄弟順次相續制である事が明かであるから一般の家庭に於ても兄弟相續の傍系相續であつたらうとしそれが長子相續と末子相續との中間階級を形成し長子相續に進展する一階段であるからその以前に於て末子相續が行はれた事は當然であるとする説を太古のものとし、大寶令を中心とするものには「養老戶令應分條の研究」(中田薫、法學論叢)は大寶令に見ゆる應令條は唐に於ける普通財産相續法を定めた應分條と食封相續法を定めた他の一條とを折衷したものとし考へたがそれは全く唐應分條のみを典型とし必要な修正を加へたにすぎないこと斷じ養老令應分條は大寶令のそれと比して家長の遺産中嫡子分を激減し庶子分を激増し嫡繼母並に女子の相續權を認めし事、相續人の嫡母繼母に對して嫡子と同一の相續分を與へた

事、女子に對して普通遺産の分前を與へたのみならず功田功封に就ても男子と同一の相續分を與へた事を擧げ相續人の範圍を擴張して嫡母繼母女子及妾にまで及ぼした事、相續分を嫡母繼母嫡子各二分庶子一分女子半分とした事、遺産より分離すべき妻家所得の財産を唐令の如く一切の將來財産に引戻した事等の特色があるとしたもの「律令の土地制度並に租稅制度と家人奴婢との關係」(瀧川政次郎、法學協會雜誌)を論じ大寶養老の立法者は不用意に唐制と北魏制とを折中した、め奴婢の受田と課役とが相應せざる事となり、ために富者に都合よく貧者に都合あしくなり其の對策は王朝政府によりて講ぜられなければも不徹底極るもので大した實效はなかつたこと述べたものがあり「九條家延喜式紙背の明法質問狀」(同人同誌)を論究し王朝時代に法律問題の質疑に應ずる事を專業とした明法家が民間にあつたらしい事當時の損害賠償が原物備償を以て原則とし、それが不可能の場合にのみ價格備償を許すものであつた事及び當時の人々の間に不可抗力による受託物の滅失毀損は受託者其の責に任せずといふ法律確信が不明瞭ながらも存在してゐた事を知

り得たことするのは、まだ大寶令の精神の全く失はれない時代の法制の一端であるが之に續くものとしては遙かに降りて徳川氏時代の法制に關するものである。『徳川時代の養子法』(中田薫、法學論叢)を武士階級の家に行はれた封建法上の養子制と庶民階級に行はれた普通法上の養子制と區別して考察し前者には養子たると同時に養方娘との縁組を意味する普通養子、將來自分の娘と結婚せしむる目的を以て取組む娉養子、一家の養子となつたものが、養方弟を更に自分の養子とするもの、當主たる兄が實弟を養子とするもの、總領たる質子又は養子が早世しその子ある場合早世者に代りて總領の地位を襲へる者が早世者の子を養子とするものを併せ含む順養子、重病危篤の際に急速に願出る末期養子、大名又は其他幕府が公用を帯びて江戸を出發して遠國に旅行する場合未だ定めらる相續人なき時、出發の際になす假養子、平時の假養子に當る心當養子、養女、妾腹の男女子を正妻の養子とするもの、無妻者の取組む父計の養子、未亡人又は未婚者にして幕府又は諸侯に奉公するものが取組む母計の養子等の種類ある事を説いてそれらは生家の利益を主とした

各種の規律が骨組となつて居たけれども、普通法上の養子制は全く私家の利益を本とした契約主義を基礎としたものであること結んだもの「徳川時代の婚姻法」(同人、同誌)も亦封建法と普通法とに區別して、婚姻の成立解消再婚等を其手續につき詳説したもので専ら幕府の封建法に於けるそれを見たものがあつて共に此時代の民法、特に家族制度に關する法制として併せ看るべきである。

次に經濟史の方面では「佐藤信淵家學全集」(瀧本誠一編)上卷が發行されて元庵以下信淵に至る迄の經濟及び農政に關した數種の著書の收録されたのは斯學の研究に取つて貴重資料を提供したものである。『長講堂領の研究』及び『伏見御領の研究』(八代國治、國史叢説)の二編殊に前者は故人が最も力を盡した研究で政治方面との交渉を細説し兩統迭立問題解決の秘鑰であること、この巨大なる御領が持明院統に傳つた、めに却つて此經濟力を基礎として兩統迭立が可能であつたこと斷じて居り後者は長講堂領と或は合し或は離れて後白河院より持明院統に傳はり崇光院より伏見宮家に傳領し給うた經路を物語つて居る。これに對抗した皇室御領であつて大覺寺統の方

に傳はり對立の財源となつた八條女院領中の筆頭である安樂壽院領に就ては「安樂壽院」(中村直勝、京都府史蹟勝地調査會報告)の中にその傳統を明かにし高倉永康の活動を述べ八條女院領が殆んど解體せられし中に安樂壽院領のみは室町時代以降にも維持せられた事を説いたものがある。「北畠親房の常陸下着は漂著にあらず」(板澤武雄、歴史と地理)と斷じ、その理由は後宇多院御領目錄によりて見るも常陸方面に可なり南朝方の御領地があるこの御領地の經略を目的として下着したものに相違ないとしたのはまた八條女院領研究の一齣に外ならぬ。同じく皇室領としては、「吉田定房」(中村直勝、同誌)を論じた中に七條女院領山城國上桂庄以下十七ヶ所が四辻宮から後宇多法皇に傳はり更に尊治親王に傳へられたのを復た正和三年七月四辻宮に返納されたのは人心を收攬せんとする皇太子の策であると言ふ説「七條院御領考」(八代國治、國史叢説)に反對し此御領は武家が口入する權利を保有して居るので、四辻宮よりの處分以後の傳領に對して武家よりの壓迫があつた、とめであらうと言つて居るのがある。次に莊園關係のものを舉ぐれば「奈良朝時代

に於ける寺院の開墾事業」(魚澄惣五郎、龍谷大學論叢)を概説し開墾事務所とも見るべき産業所のある事、開墾には必ず堰溝を修造せねばならぬ事を言ひ中央大寺が地方遠隔の地を開墾する時は恐らく其地方に子院末院が建立された事であらうとし「高野山領紀伊國南部莊の研究」(相田二郎、歴史地理)に於ては特に請所の研究に力を注ぎ本莊は保元平治以前から請所であり承久以後に地頭が置かれて後もなほ地頭請所であつた、多くの場合本家の得分は領家の手を経て收得さるゝものであるに反して南部莊では請料は本家と領家と別々に二口として收めたものであつて一の特例であるとし「請所の研究」(八代國治、國史叢説)はまた不充であるを難じ、本莊の請料は見米と色代との二種であつたが請所が出来るに莊園の各種の産物を領家の欲するまゝに雜役として宛課する事が出来ない事になり其等の産物は莊園内で取引されて行く事になる事を指摘し「梁田御厨の研究」(中山太郎、國學院雜誌)は下野國足利郡にある梁田の御厨を研究し其起源についての諸説は何れも信するに足らずして不明といふ外なければ少くも久安仁平の交還義國在世の時には存在

し以下義経義清と關係を保ちつゝあつて、口入の神主は荒木田氏の支流であつた事を述べ後世足利地方が織物の産地となつたのは同地が御厨として皇太神宮に絹織物を納めたに起因すとして莊園の貢物と地方物産との關係を説いて前者の説の一例を補ひ「中世に於ける關所の研究」(相田二郎、歴史地理)は前年來引き續いたもので特に經濟的關所に力を入れ、鎌倉中期以前に於ては國衙側及び所領の領主側に所有されたのであるが此時代以降社寺の造營料所として社寺に寄進せらるゝものが多くなつたのは社寺の修理料を支持した國衙の實收が減少したので、その缺を補はれたものであるとし、もご海路にあつた關が南北朝以降に至つて陸路上に於いて著しく發達し街道の要地宿驛門前乃至都門市中にも關所を設け専らその收入を目的とするに至つた事を説いた。更に方向を改めて商業及び商人を中心としたものには「古代の商人」(喜田貞吉、歴史地理)の素性を研究し漁民、舟乗りの如き海人關係者がその第一であつて伊勢及び近江の商人は何れも海人の系統を引くものであるとし第二は山人浮浪人の如き社會組織の落伍者が多い事を指摘し以て商人の社會

的地位の決して高いものでない事を論じ更に降りて「中世の商人と海賊衆」相田二郎、同誌)との關係を論じたものがあるが、既に堺港の條に記したから、今は省略する事とし次に「室町時代に於ける京都の商業」(魚澄惣五郎、歴史と地理)を見、金銭支拂方法を以て爲替が行はれたので三條の大黒屋とか布袋屋といふのは恐らく宿屋であつて且つ地方の人々のために爲替手形の取扱をしたものであらうと言へるはまた此時代の商取引の一面を究めたものであり「搖籃期に於ける近江商人」(牧野信之助、歴史地理)を觀察し蒲生郡中野村今堀日吉神社を中心とした得珍保が紙座、伯樂座として特權を有し、横關が御服座としての特典を保持し蒲生神崎愛知犬上の四郡を本場として國中を東西に活躍せし有様を記し、國外通商は京都は勿論であるがその最も盛大であつたのは北伊勢地方及同地を經由して濃尾方面への展開であつたと言ひ彼等が斯様な發展を來した原因は近江國が占むる交通上の地位の外に山門の勢力及びその保護によるものであること斷じ市庭の間を巡回する行商の出來た事は近世期近江商人の濫觴であるとし「日本商人史觀」(三浦周行、同誌)は

王朝時代に於ける商人があらゆる危険苦痛に打勝ち全國に行商せる結果として地方の富源も開發せられ都會の文化が草深き地に移植された隠れたる貢獻を注意すべく武家時代になつては武家の經濟政策の基調が御家人の知行であつた點から物慾を啖り奢侈を煽るやうな商人の營業は一層嚴重に取締られた結果同業組合を組織して自衛策を講じたので室町時代は一種の商人黃金時代と言ふべく外交、政治すべて彼等の力によりて左右さるゝ程であつたが家康及び其後繼者は町人といふ一種低級な範疇に押籠めた事を論じて近世町人の勢力に觸れ「乾字金の流通に就て」(柴謙太郎、同誌)のべ、その發行日を寶永七年四月十五日とする説を排して四月廿七日であるとし爾來元文元年に至る二十七年間盛んに流通した事實を細説し改鑄發行の理由は物價の調節と改鑄の利得とであつたが幕府の改鑄政策が常に失敗に失敗を重ねた、その理由は物價は民衆の手によりて動かされるものである事を有司が知らず通貨の整理をなさんとする權威よりも行使の心理の方が力強き事を力説し惡貨仲間の乾字金は元祿金と共に流通し慶長金を驅逐したけれどもこれは元祿改鑄の

繼續であつて乾字金發行によつて出現した事象ではないこの現象をグレシャム法則によりて説明せんとするのは該法則の何物であるかを知らぬものであるとし、また幕府が大坂、堺、兵庫・西ノ宮四ヶ所の町人に課した「天保十四年の御用金につき」(幸田成友、東京商科大学創立五十年記念論文集)で論じ、從來の御用金は米價の下落による諸家の財政難を緩和する事を計つたのであるが天保以後は外國に對する種々の施設、江戸本丸の再建、長州征伐の經費に充用するための者で其使途が全然相違する而して其申渡が精細になつた事、頻繁になつた事は即ち御用金が幕府自身のための者であつたからであるとし御用金申渡、納入、償還の様子を詳述したのを併せて徳川氏幕府の經濟政策の失敗すべき經路を説明した二方面をも見る事が出來よう。而して財政の方面では「舊仙臺藩の財政狀態の沿革」(土屋喬雄、國家學會雜誌)を記し常に國用不足であつたがそれは歳入が比較的少いに反して家臣に給する知行が甚だ多い事と凶荒のためと、幕府への御手傳のためとであり其薄弱なる財政を補はんとして行つた財政策中重なるものは藩營事業、就中百姓作

徳米の購入獨占である買米であつてもし成功すれば常年には辛うじて國用不足を補ひ得た、不時の大出費は家臣百姓町人より貸上米上納金を求め大阪の富商から借金されたのであるといひ一體に大名の財政は漸次困難となつたのであるが仙臺藩はその代表的のものである、特に同藩は米以外に特殊の財源がなかつたので僅かに買米と鹽專賣制によりて纏縫したのであると言つて居るのはまた前のものと對比して一貫した或物がある事に氣附くであらう。「舊藩内外連債處分」(澤田章、史林)は明治四年七月廢藩を斷行せる結果舊藩が有せる内外債を負擔消却しなければならなくなつたので五年二月大藏省内に負擔取調掛を設置し各府縣より申告した舊藩債約八千萬圓の内債七千四百萬圓餘について天保改革に於ける貸金新政令を根據し其以前のものはすべて棄捐し以後のものを調査し之を公債證書を以て支拂ひその間作偽欺罔の輩を嚴科に處する事とした事情を述べ外國債整理のために判理局を設けて公私債の甄別に務め井上馨等が債額削減の交渉を始め即金で消却した金額を明かにしたものがあ

る。

昨年著しき現象の一に農村及農民の問題がある。まづ法制上より「江戸時代に於ける田島永代賣買の禁止」(三浦周行、經濟論叢)をこき小農が其田畠から離れる事を恐れ其所有地を維持させ乏しい乍らも彼等の生計を持續せしめんとする法の精神に基いたものであつてそれは武田氏長會我部氏等の法制に既に現れた所で徳川幕府は更にそれを繼承したものと云へるが、しかも單に繼承したのみではなく武士を本位とした國民の食糧政策から出發した者であるとし其實施には可なりの苦心が拂はれた事を述べた、安政三年六月十七日讃岐國鷓足郡中通村の農民三十二名が一團となつて村端なる國境を越え南方阿波國に入境し自村の苦衷を其村役人に訴へんした「安政年度に於ける讃岐農民の越境騒動」(小野武夫、史學)の原因は隣村造田村との間に起つた一帯の林野所有權に對する上司の捌きへの不平であつたが兩國領内は非常な驚愕を以て此事件を注意し阿波領に於ては頗る優遇の途を講じたと共に後繼者の入村を監視した事より兩國村役人の折衝、越境人の歸國等を記述し當時の村が一個の自治團體であつて一種の法人格を有した事、部落有林野が

當時の農細民に取りて頗る重要なものなりし事、村役人ミ村役人ミの間に於ける國際の禮儀が相當よく守られた事、及び當時の農民が強訴や一揆によりて目的を貫徹せんとして結局自業自滅に終るべきを知つて居たから越境をして自國の役人を驚かし兼ねて他國領の村役人に訴へて其の同情によらんとして一種の氣質等を指摘したのはその方面の代表的のものであるが「秋田藩及び鹿兒島藩の人口政策」(土屋喬雄、國家學會雜誌)を説き秋田藩にては文化八年以來人口の増殖を計り法令刑罰を以て禁止するの途に出でず専ら米又は金を給して養育せしむる方針を以てし感恩講なるものも出來て實效を擧げた事をミき鹿兒島藩では他の諸藩の人口政策が中期以後に行はれたに比して既に其初期に現はれて居り正保十二年三月に光久の命によりて子殺を嚴禁し、更に天保の初年に至りて國學者山田清安の建議によりて人口政策が行はれたが其方法は不明であるが後に高崎正風氏のやつたのはやはり養育料の調達、養育米の給與によつたものである。ミし其目的の農業勞働力の増加を計るにあつた事は勿論ながら社會政策的目的乃至單なる惡俗矯正の目的もあつ

たらうと思ふと言つて居るのも又農村問題の一つである「郷土制度の研究」(小野武夫)は、徳川幕府は兵農分離を以て治國の要諦としたけれども其封建治下に於ける人民の統御は必ずしも一樣に行かなかつた従つて此時代に於ける郷土出現の事情も區々であるが大體から見ても中世の農兵制度の繼承が主であり中絶したものの再興や軍役に出勤せしめんが爲に特に採用したもの及び公共事業の功勞者を表彰する意味で郷土にしたもの並に家中の武士を農村に放ち移住土着せしめたもの等があり、特置郷土救濟郷土は戰鬪員たる性質を有し舊族郷土、登用郷土は非戰鬪員たる性質を有するを説いて居る、その郷土に深き關係を有するだらうと思はるゝものに「庄園内の浪人」(牧野信之助、鎌倉時代の研究)がある、その生活狀態を説かんため一例としての滋賀縣葛川の浪人を擧げ住人ミは全然別個の家を形成して一類をなし新地を開拓して新在家を營み初めは盜賊人ミ何等撰ぶところなかつたけれども功勞によつては住人ミ同一の地位に高められたものでありまた莊内緩急の場合には武力の保持者として警備に具へられたものである。ミし更に溯りては「御家人の

特質」(三浦周行、經濟論叢)を述べ御家人は譜代相傳の御家人に新附のものにあつて平家及び頼朝反對者の家人等もまた降附すれば御家人に加へたものであり、女子の御家人もあつたし神社寺院の中でも幕府の祈願所として所領を恩給されたものはまた御家人に准ぜられたが陪臣は容易に御家人には加へられなかつた。かくて相當の手續によつて御家人になつたものに對しては頼朝は自ら下文を與へ其所領を安堵し幕府の職官に任じ地頭をなし守護をなし更に朝官に任叙の推薦までもして彼等を優遇した。而して其の御家人の義務は第一が京都大番役でこれは中古兵制の廢弛に依りて新に生れたる新制度で從來の衛士に代ゆるに武士を以てせるもので幕府が給與若しくは承認せる所領の分限に賦課したもので一種の所領役であつた、第二は鎌倉大番役でこれは幕府の創設以來既に儼存した制度であるに斷じ、鎮西守護所大番役、臨時の兵役、其他の公事等に就いて説いたのは「御家人生活」(同人、鎌倉時代の研究)の基準とも言ふべき貞永式目が編纂された原由の一に公家側の裁判官が任意に法文を引いて輕重を定むるために意見の一致を缺いたのに對抗し

たものであつてその根據は道理の指すところに依る事とした、而して幕府の眼中には御家人以外はない、しかも其御家人間に生ずる貧富の差を少からしめんがために此式目にされ位苦心が拂はれて居るかわからない然るにも均らず元寇に際して御家人に非るものも一時將軍の麾下に移されたので戰功あるものに對しては御家人同様の恩賞を與へる事を約した、而して其幕府は苦境に陥り爾來敵の再舉に脅された御家人は奢侈の生活と相並んで不斷の警備のために困憊の極に達し內的に幕府倒潰の要素を十二分に備へて居つたに記して居るの併讀して所論の歸趣を察知すべきである。また別に「常平倉の研究」(本庄榮治郎)に於て徳川幕府には常平的の施設は甚だ盛んであつたけれども常平倉そのものはなかつた、而かも各藩に於ては却つて常平倉を設くるの必要はあつたのであるがこれを實行するに就ては種々困難な事情があつたから僅かに數藩しかも特に英邁の士が藩侯であつた所のみ行はれた、その代表的のものとして水戸藩のそれを研究し烈公の穀價調節策として常平倉が置かれた事をとき常平倉はその他に軍糧としてまた財政流用として役立つた

事を言つたのミ「竹山先生の經濟思想」(同人、文科學術講演集)を見、先づ當時の經濟思想は根本に於て封建制度及び鎖國を是説し維持せんとするものであり支那思想の影響ある事、財政上では入るを量りて出づるを制し貴穀賤金であつた事を指摘し而して竹山は封建制度や參覲交代の如きを理非如何に拘らず祖法の故を以て墨守するを排し米價問題に就ては全國の中心たる大阪一ヶ所に倉を設け米價の中價を公定し、米權政府の掌に收むべきを説けるは他の學者の所論よりも適切であるとし、種々の點に普通の儒者よりも卓越した説の少くない事を認めたのは共に米穀中心の經濟問題であるが「琵琶湖開鑿問題について」(牧野信之助、歴史ミ地理)考察し、大阪が經濟上の中心となるに及び寛永末年には北國貨物の輸送を西廻航路によりて企てられ敦賀、小濱以下琵琶湖沿岸諸港の痛手最も甚しく之に對抗せんとして敦賀鹽津間の開鑿を企圖したのは寛文九年七月以降であるとしたのはまた此時代の經濟史の一面であつて、その「琵琶湖治水沿革誌」(清水保吉、中村五十一郎)は概略ながら古來の治水事業を述べて開鑿問題にも言及し近くは明治廿八年

の大洪水の狀況も詳記して居るものである。(中村)文學の方面では萬葉集に關しては「萬葉集名義考」(山田孝雄、國語ミ國文學)は萬葉ミは萬の言葉ミいふ義では無く萬世の義であるとし「桂本萬葉集解説」(佐々木信綱、心の花)は萬葉集古寫本中最も古く且つ筆跡料紙の殊に優美である御物桂本萬葉集の事を解説し、其の筆者に就ては貫之、順、行成、俊房の四説あれど何れも首肯し難く、筆者は知るを得ないが平安朝中期の能書であつて其の圖樣も亦古雅である、更に之を學問上より見るも校勘の資料ミして價値が多いミて他本ミの文字の相違せる箇所を例示し「萬葉代匠記に引用したる長流の説について」(橋本進吉、同誌)は代匠記に引用した長流の説は其の出所の明なものは殆んミ皆長流の著萬葉集管見から出でたもの、みであるミいひ「荷田春滿の萬葉問答に就いて」(佐々木信綱、國語ミ國文學)は春滿の萬葉問答中より注意すべき所々を抜抄して未見人の爲に示したものであり「萬葉集に出でたる三伏一向及び一伏三起の意義に就いて」(葛城末治、同誌)は前者をツクミ訓み後者をコロミ訓む義に就ては今尙ほ詳でないが朝鮮の遊戲中に樵戯

こいふのがあつて三俯一仰を徒、一俯三仰を杰こいつてゐる。此の徒は鬼こ同音で鬼をツク(月)こ訓み、月夜を三伏一向夜こ書いたものこ思ふ。又杰は邦音クツ又はクチであつて、これがコツこなり、朝鮮音では之をコルこ發音するのでコルが轉訛してコロこなつたものこ思ふこ云ひ「知智乃實こ銀杏(新村出、心の花)は萬葉集にある枕詞チ、ノミに就き從來それを銀杏實、椽實、天仙果若しくは松球こする四説があるが天仙果説が最も穩當こすべきであるこし「延壽王院本袖中抄(野村八良、史學雜誌)は同氏が新たに手に入れた延壽王院舊藏袖中抄に就てそれが流布本の脱簡を補ふに足り流布本よりも内容が多く、語句も異り且つ誤字を訂正する助こなる事は注目こ價するこいひ、其他「萬葉集こ民謠この関係(見山信一、國語こ國文學)「萬葉集の女性(久松潛一、同誌)などがあり、源氏物語に關するものには「源氏物語研究の初期(山岸徳平、同誌)は鎌倉時代を其の研究の初期こ見做し此期は研究が最も多方面且つ動的であつたこし「源氏物語こ謠曲(佐成謙太郎、同誌)は能作者は源氏を貴重な古典こして愛誦し、平安情調の表現を大切に殊に

其の詞章は巧みに引用して謠曲の古雅を加へるこに努めたこいひ「源氏物語千鳥抄について(橋本進吉、同誌)は東大國語研究室にあつた加持井宮舊藏千鳥抄は類從本こ異なる所多く、從來未知の事實を明にする事が出来るこて其の解題を試み「三條西家證本源氏物語(山脇巖文)は本書の寫である吉澤博士本、久原文庫本、京大所藏舊中院家本の三本の奥書こ實際公記こに依つて本書は如何なるものであるかを見やうこしたもので「源氏物語

研究史の新資料(橋本進吉、國語こ國文學)は源氏の本
文研究並に注釋は河内守光行其子親行により初めて大成されたのであるが、兩人の研究が如何にして爲されたか等の點は多く不明である。然るに前田侯所藏の古寫本原中最秘抄には親行、其子義行、孫知行の奥書があつて光行以來代々の源氏研究次第を叙すると委しく、未知の事實を傳へてゐるものが多いこて其奥書を掲げて之を解説し「源氏間こ紫式部(櫻井秀、中央史壇)は室町時代以來石山寺の源氏間こいへば源語の舊蹟こ認められてゐるが室町以前には源氏間なる名稱こ式部こは何等關係を持つものこは考へられてゐなかつた。諸寺には源氏間があつ

て他姓の公卿又は武人等の參入に備へた室名であらうと考へる、石山寺の源氏間も此類で、それを式部參籠の室又は源氏起草の爲めの參籠室であるとするのは信ぜられないと云ひ、其他「源語及日記より見たる紫式部」(手塚昇、國語と國文學)「源氏に於ける古代の註釋及び研究」(松井簡治、同誌)「紫式部の物語の製作上及び本質上の主義」(志田義秀、同誌)「源氏物語論の考察」(久松潜一、同誌)「源氏物語中の引歌」(鳥野幸次、同誌)「雲隱否定説」(野村八良、同誌)等がある。又「宇都保物語は鎌倉以後の僞作か」(松下大三郎、國學院雜誌)は此物語中の人名に平安朝末鎌倉初期の人名と一致してゐるものが澤山ある點より見て鎌倉以後事に依れば南北朝以後のものであるかも知れぬと云ひ「堤中納言物語に關する一考察」(尾上八郎、日本教育)は此物語は從來堤中納言の書いたもので堤中納言とは藤原兼輔のことであること云はれてゐたが之は兼輔時代の作ではない。此物語はもつて其の各篇は獨立して居つたもので、それを取纏めて現存の如く一冊とした時最初に出て、來た一篇に堤中納言の事蹟があつたので全體の名稱としたのであらうと云ひ「水鏡の書名卷數著者

等に就いて」(西岡虎之助、歴史地理)は永正七年の寫である柳原家記録中の砂巖といふ書には水鏡を水鏡物語として上下二帖に分ち上帖は雅頼の撰、下帖は後人の書續としてゐる、之は普通に中山忠親の撰としてゐるに對して一説として對抗する價值あるものであると云ひ「諸書に引かれたる平家物語につきて」(後藤丹治、藝文)は本書著述の年代に關しては未だ定説はない、それに就ては本書之餘り隔らぬ頃の書物で平家の語句を引いたものを調査するのの一の研究法であること「鑑鏡抄、六代御前物語等により諸本の存否を考察し」(慈心坊の説話と冥途蘇生記)(同人、同誌)は平家物語中の慈心坊の説話は同坊の住んでゐた攝津清澄寺にある冥途蘇生記の文と殆ど同様であることにより此記は平家の原據となつたものと認めてよいと云ひ「東關紀行私見」(同人、同誌)は此書は後人の僞作とする説を駁し其の小序に示す通り仁治年代乃至其の前後の述作であること次に其作者を長明、光行、若しくは親行とする説は共に無理があること云ひ、「大福光寺本方丈記に就いて」(野村八郎、國語と國文學)は本書と流布本との相違を述べ、奥書等によつて本書が長明の

自筆であるといふことは首肯し難いこと云ひ「會丹集の所謂順作の詞書及歌に就て」(早川幾忠、同誌)は會禰好忠の家集會丹集の卷末百三首中、最後の三首を除く百首及び其の前にある數十行の詞書は古くから源順の作と言はれて来たが、それは順の作ではないと論じ、次に好忠作百首和歌の題下に題意に滿つるだけの歌數がない事は疑問とすべきで、之はも所謂順作の五十首は好忠作五十首の下に屬してゐたもので、夫が傳寫の際に綴り誤られたものであらうと云ひ「千五百番歌合に就いて」(川田順、心の花)は此の歌合は和歌史上最大の歌合である事、其の作者は新古今の作者の主要なる者を網羅せる事、其の歌が新古今の最も主なる量的内容を成してゐる事、定家を中心とする新勢力が此の歌合に至つて確立した事等を挙げ次に此の歌合の歌としての價値を述べ「長歌衰亡の源因」(兎山信一、同誌)は夫を流動的文學から固定的文學への推移、長歌の詩形其もの、非永續性、社會的事情の三に依るとし「新井白石の詩論」(岩橋小彌太、歴史と地理)は白石より唐金梅所に宛てた享保四年六月、同五年四月付の書狀によつて白石の詩論を示したものであ

る。其他「住吉物語の一異本」(野村八良、藝文)「更科日記流布の傳説」(玉井幸助、國語教育)「清少納言事蹟雜考」(櫻井秀、中央史壇)「契沖傳資料」(佐々木信綱、心の花)「下河邊長流」(佐々木信綱、同誌)「近松門左衛門の所出に就て」(田邊密藏、國語と國文學)「近松と時代」(田中辰二、同誌)「鬼貫の研究」(鈴木重雅、同誌)「蕉門分布史觀」(勝蜂晋風、早稲田文學)「芭蕉と芭蕉庵」(萩原蘿月、同誌)「幻住庵記について」(沼波瑠音、同誌)「芭蕉俳諧の心法について」(太田水穂、同誌)「芭蕉の詩想に於ける現代的意義」(高須芳次郎、同誌)「芭蕉の研究」(徳本正俊、國語教育)「蕉風と初期俳壇との關係」(猿渡義勇、觀想)「乙丑の新春に屋代輪池が詠める異國情調の歌」(新村出、心の花)「徳川時代に於ける漢文の變遷」(佐久節、斯文)等がある。學術方面では、日本語の所屬に就いて(堀岡文吉、藝文)は今尙ほ未解決の日本語の所屬問題につき參考資料として身體に關する言語の比較研究を述べたものであり「白石の語源論」(伊藤愼吾、國語と國文學)は語源解釋上に白石は如何なる見解を有してゐたかを述べ「東條義門の國語學」(龜田次郎、佛教学研究)は彼の國語に關する著述

について述べ、それ等は一として本居宣長春庭父子の所説の不完全を補訂しないものは無く、本居父子の國語學は義門を踈つて初めて完成したといふべきであること云ひ其他「本居宣長の字音研究を評す」満田新造、國學院雜誌等があり、教育方面では吉備眞備の私教類聚について(西岡虎之助、中央史壇)は同書は眞備の作として證明すべき材料は無いが、政事要略には三四其の内容が示されてゐるより推せば彼の作として肯定してもよい、少くも平安朝中頃には彼の作として信ぜられてゐた事は確であること云ひ「菅家遺誡とその和魂漢才説(加藤仁平哲學研究)は同書の偽作と教育史倫理史上重大な意義を有する第廿一、廿二兩章の竄入に就いて考察し又本書と和魂漢才説との日本思想史上に於ける地位を説いて居り(具原益軒の教育説について)(今村孝三、歴史と地理)は彼は我邦に於て教育學の端緒を開いた人なる事を述べて彼の教育説を紹介し、最後に彼は著書によつて社會を利せんとした事は特筆すべきであること云ひ「細井平洲の教育説(同人、同誌)は嚶鳴館遺草によつて彼の教育説を觀察し、彼は益軒と比肩すべき徳川時代の大教育家で

あつたこと云ひ「足利學校の沿革を徵すべき古文書(大森金五郎、歴史地理)は尾張の儒者堀杏菴著中山日録には足利學校第十一代の痒主陸子との往復文書が收めてあつて同校の沿革に關する有益な資料であることを述べ其他「足利學校及び金澤文庫について(同人、中央史壇)「足利學校藏書考(足利衍述、同誌)「金澤文庫の存本(同人、同誌)「我國の圖書館の回古(和田萬吉、同誌)「湯島聖堂沿革略(三宅米吉、斯文)等がある。風俗に關するものでは「賭博と拘模の研究(尾佐竹猛)は兩者の起源沿革から其方法に至る迄、頗るこまやかに記述したものである。著者が調査上特殊の便宜ある地位にあつて多年傾倒した貴重の收獲であるに相違はないが餘りに手に取るが如き書き振りには斯道に取つて恰好の手ほごきにもなりはしまいかさ危ぶまる、程である。「上古食肉の習俗と禁忌に關する考察(植木直一郎、國學院雜誌)は本邦上古には肉食が行はれた事は從來説かれてゐる所であるが併し或る種の食肉は初より一般人に嫌忌せられて居つたやうである。之は禁忌の信念に基いたので、後文化の向上に伴つて道徳的規範となり社會の禮制に乃至つたこと説き

「正月の若菜小松七草の關係に就て」(江馬務、風俗研究)は是等は何れも支那の古俗から來てるものであるとして其の變遷等について述べ「庚申について」(鳥野幸次、國學院雜誌)は之はも道家の説に基ついたもので、唐との交通の結果本朝にも將來したといふ事より庚申に關する迷信附會等に及び「賀の祝に就て」(江馬務、風俗研究)は年賀は奈良朝より行はれ始め平安朝から漸次盛きなつたとして其の沿革作法の變遷等を述べ其他「平安朝以前に於ける歲事の發達」(櫻井秀、中央史壇)「伊勢物語に現はれたる風俗」(神田勇治郎、風俗研究)「物合せの遊戯」(江馬務、同誌)「御座風俗史」(同人、同誌)等がある。更に昨夏宮城二重櫓修繕の際其地下より發掘された十數體の白骨が人柱であるか否かにつき問題を惹起したが、それに關する研究としては「人身御供三人柱」(喜田貞吉、中央史壇)「上代に於ける殉葬の風について」(後藤守一、同誌)「人間犠牲の奇習に就て」(新井龍峰、同誌)「土葬法地鎮法」(赤堀又次郎、同誌)「江戸城につきて」(大類伸、同誌)「築城三人柱傳説研究」(藤澤衛彦、同誌)「尾張國府宮の直會祭を中心としたる人身御供三人柱」(加藤玄智、同

誌)「殉死と埴輪」(高橋健自、同誌)等がある。歌舞音曲方面には「新たに知られたる上代の歌謠に就いて」(佐々木信綱、藝文)は近衛公爵家所藏天元四年古寫の琴歌譜を紹介したるものであり「猿樂の狂言について」(岩橋小彌太、風俗研究)は今日見る如き狂言の能は「おかし」から出たもの、如く、世阿彌の頃には今日の如き狂言があつた。狂言の詞は過半室町盛時に出來たものでそれを全部此時代のものとすることは出來ない云てゐる。美術建築方面では「法隆寺繪殿聖德太子繪傳に就て」(藤懸靜也、國華)は此繪は平安末延久元年頃のものと認められ筆者は秦致真だ云はれてゐるが致真は致貞の誤であらう。全體に互り後世の補筆と補色が甚しいが古體を以て畫かれた部分もあつてまた貴重な資料であるを説き「北野天神緣起に就て」(同人、同誌)は之は現存の神社緣起中最古の物で承久頃の作を傳へられてゐるが恐らく其頃の物で、地獄なごを寫してゐるのは鎌倉初期の神佛習合の結果である。其の繪は大和繪中の代表的作物である云ひ「源氏物語畫卷に就て」(同人、國語と國文學)は徳川義親益田孝兩氏所藏の源氏物語畫卷に就きそれは源語を題

材とした繪卷中の最古最秀のものであると説き「山王靈驗繪卷に就て」(同人、國學院雜誌)は駿河國沼津日吉神社所藏の此の繪卷は弘安十一年の奥書があつて北野神社の天神緣起に次ぐ古い物であると説き「矢取地藏繪緣起について」(牧野信之助、歴史と地理)は滋賀縣安孫子氏の保管せる享徳二年の矢取地藏繪緣起に就て述べたものであり「後水尾院の宸影に就て」(藤懸靜也、史學雜誌)は從來同院の宸影は寛文二年に探幽が寫し奉つたものとされてゐたが堯恕法親王記によれば御面相は同親王が寫され衣文だけを探幽が畫いたので、寛文四年六月に出來上つた事は確であるとして般若三昧院及び泉涌寺に賜はつた兩宸影の描法等に就て述べ、外に京都靈源寺相國寺等の所藏の宸影にも説き及び「浮世繪に於ける洋畫趣味浸潤時代」(北齋派の活躍)(織田一麿、早稻田文學)は寶曆年間奥村政信に始まつた洋畫趣味應用は浮世繪の端緒を開き、其後歌川豊春は阿蘭陀銅版畫の技法を眞似て茲に完成された浮世繪となり續いて司馬江漢の銅版畫となるに及んで畫壇は洋畫趣味浸潤時代の序幕を開いたといふ事より其以後北齋及び其直門の人々の受けた洋畫の影響

浮世繪全般に與へた洋畫趣味及其の反響等に就て述べ、西方院の阿彌陀如來像に就いて「丸尾彰三郎、國華)は嘉禎から寛元の間に創始されて西方院の阿彌陀像は快慶の極めて老年の作で恐らく終作に近いものであらう。之は彼の歿年次歿年齢を知るに或る光を與へるものであらうと云ひ「木喰五行上人の研究」(柳宗悅、女性)は徳川末期に廻國巡禮の傍ら一十體の佛像を彫刻しやうとの心願を起して殆んど日本全土に其の足跡を印した五行上人の主として彫刻家としての方面を世に紹介したもので、現存せる三百體に近い作品に就て彼の手法を論じ、當時信仰薄く技巧のみが錯雜になつて居つた宗教藝術界に於て信仰に深く萌し自然に手法を任した上人を見出すのは特筆に價するに云ひ「廣隆寺の瑠璃扇に就て」(市村英輔、中央史壇)は此の扇は推古時代乃至少くも天平以前の作であらうと云ひ「藤原時代に於ける經卷の意匠に就て」(源豊宗、美)は奈良朝には既に相當意匠を凝した經卷が製作されたが藤原時代に至つて一段の進歩を來したとして清衡經嚴島經扇面經神光院の金光明經等の意匠に就て述べ「日本の文化を世界に代表する法隆寺伽藍」(關野貞、

太陽)は主として同寺の金堂五重塔の一部に就て述べ、先づ伽藍の制度と建築美の事を説き次に基壇の石材は二上山の火成岩なる事、伽藍建築様式は南朝系に屬し百濟を通じて輸入されたものなる事、瓦當文様は鳥佛師の創意に出でたものであらうといふ事、金堂の壁畫は天智朝迄は下らぬといふ事等を述べ「法隆寺東院創立當時の計劃」(長谷川輝雄、建築雜誌)は伽藍沿革大要、現存各建築物の構造形式及創立沿革、創立時に於ける伽藍計劃の推考を述べ、終りに復原圖の説明が加へてある「四天王寺建築論」(同人、同誌)は當寺の建築を研究した結果意外にも其の廻廊外廓線は創立時飛鳥時代の常用尺たる東魏尺を以て計畫された跡を完全に保有する事を知つた。當寺の建築につき詳細に叙述し、最後に飛鳥期伽藍の配置方法を論じてそれに四天王寺式及び法隆寺式を名づくべき二種があつて前者は支那南北朝より百濟を経て傳來せる様式で後者は我が獨創に係るものであらうと述べ「神社及び寺院建築」住宅建築(喜田貞吉、歴史地理)は出雲大社の社殿は大體に於て太古の宮殿の制度を其儘に保存し古代住宅建築の趣を見るべきもので伊勢神宮の宮

殿は大社造の古風らしいのことは趣を異にして解釋に苦しむ點が少くないが之も嘗ては大社の如く高貴の御住宅建築の態を爲して居つたものと思ふ。信濃の善光寺は今尚ほ古代住宅建築の名残を其一部に留め之により古代寺院の發達の様子がわかり又之を大社造り神明造りに比較して住宅建築の變遷が知られる。述べ更に法隆寺の建築に就て論じ伽藍緣起資財帳によつて當寺が推古十五年に出來たものとする人があるが之は確でない。寺其物は以前から存し推古十五年に始めて佛像を鑄て其寺に安置した。と解すべきであらう。當寺はもと太子の宮殿斑鳩宮で推古十四年に太子が天皇の御爲に岡本宮に法華經を講ぜられた布施として水田を與へられたのを機會として其宮を寺に改められたものではあるまいか。述べ次に當寺が天智九年に一屋無餘の大災に罹つた事は記録上毫も疑なく其再建は和銅の頃に主要なる建物が略ぼ整ひ、講堂は天平二十年後に建立されたものである。もし更に法隆寺の建築物住宅建築との關係から之を觀察して此寺は後に見る如き堂塔伽藍を具備したものでなく、元の斑鳩宮を中心とした宮殿建築であつたと假定すれば、この寺に關す

る種々の疑問が解けるに論じ、之に對し「喜田博士の神社寺院の建築に住宅建築を讀みて」(秋山義一、同誌)は博士が斑鳩寺を以て直ちに法隆寺とするのは早計に失するにいふこと、又この寺は宮が改められたものにせられてゐるが全然別のものであるにいふこと、及び博士が法隆寺資材帳に推古六年水田を中宮尼寺、片岡僧寺伊河留我本寺に分つたことあるのは誤であらうにせられてゐるのは首肯し難いこととを論じ「琉球の建築に就て」(伊東忠太、斯文)は初に琉球の建築の様式を述べ次にそれが内地に比するに數百年も時代が違つて居る事、普通に支那系統に屬する建築に云へは安南朝鮮及び古代日本を數へるのであるが以後は琉球をも加へる必要がある事を説いてゐる。其他「法隆寺東院に唐招提寺の建築裝飾」(千熊宇平、美)「詩仙堂に就て」(河野輝夫、竹島卓一、牧野正己、山本勝、建築雜誌)等又見るべく、文化の方面に於ては「樂浪帶方二郡の遺民に我が上古の文化」(木宮泰彦、歴史地理)は應神天皇の御代に樂浪帶方の漢人が大集團を爲して我國に移住したがそれは彼等が我國土に憧憬した爲めにもよるが又我朝廷が彼等の有する藝能を利用せ

んが爲め特に使を派して彼等を誘導したにも依ること次に彼等が及ぼした物心兩方面の文化的影響に就て述べ、「吳織漢織」(松岡靜雄、中央史壇)は若し吳織漢織に區別があつたならば支那人(樂浪の)様式韓人様式の意味であらうに云ひ「文化史上に於ける藤原廣嗣の亂」(西岡虎之助、同誌)は此亂は新舊文化の争の象徴であり結果は舊文化は凋落して新文化の勝利となつたこと云ひ「源信を中心とする日宋文化の交渉」(西岡虎之助、史學雜誌)は從來我國の文化は支那大陸の文化に對し常に從屬的であつたが源信時代には我文化も著しく進歩し少しも大陸のそれと比肩し若しくはそれに近い程度迄に向上してゐたこと云ひ其他「本邦石版術の發達」(織田一麿、新舊時代)又見るべきである。(松野)

思想史方面に於ては先づ清原貞雄氏の「日本國民思想史」を挙げねばならぬ。著者は此書に於て思想史の意義を限定し、廣義には國民の信仰・迷信・知識・風尙其他苟も思考並に信仰に関する史的研究は悉く之を含め狭義には所謂哲學史と相近く一部代表的思想家の思索の跡を辿るものとなし從て上代に於ては國民一般の信仰・知識・思想

を攻究し鎌倉時代以後に至つては一部思想家の作物をも併せて闡明せんとした。其中平安朝初期の陰陽道鎌倉以後の神道論の發達江戸時代中期の國學者の思想あたりは尤も力を注いだ所見ゆる。凡そ思想史の含むところは廣汎であり其の期する所も亦特別のメトードを要するものであつて此書に於ても未だ之等を決定し得たは云ひ得まいが兎に角近來此種の研究が盛んになつたのは慶ばしい事である。而して其の政治・經濟及社會に關する論文では、「王政復古より普通選舉まで」(藤井甚太郎、東亞の光)は、王政復古、神武創業の精神が公議公選の思想を結び以て代議政體の制度を確立するに至りし思想的過程を述べ、「西南戰爭前後より憲法發布に至る政治思想」(山田止戈三、國家學會雜誌)は民權運動の強盛なりし時代に於ける政治論を分析し夫等の奥には強き國家中心思想の動き居れることを指摘したものであり「歷史上より見たる現代思想」(喜田貞吉、歴史地理)は、現代の思想界は人間平等といふ理想を目標として進まんとしてゐるがその由つて來る所は過去に於ける甚しき不平等の反動であることを究明せるものである。倫理思想では「源語時

代の思想特に節操觀に就て」(櫻井秀、國語と國文學)は中古の貴族は甚しく無規律で節制を缺いてゐた如く考へられるが眞摯に文獻を觀察すれば必ずしも然らず好色は好淫と異り節操は精神的のものであつたを説いてゐる。宗教思想では津田敬武氏の「神代史と宗教思想の發達」は

先づ我が國神話を縱横に分析研究し更に古代文化に宗教的要素の多きことを述べて以て國體觀念の發達に宗教思想が重大なる貢獻をなしたることを證してゐる。「萬葉歌人の神觀に就て」(二宮正彰、奈良文化)は彼等が到る處に神を認め且つ之を極めて相近くして而も熱烈なる信仰を有せしことを述べ「神佛と佛神」(高橋俊乘、歴史と地理)は推古紀以來國史には佛神の用例多く殊に平安中期より江戸初期に用ひられしは神佛同根とする本地垂迹説を佛敎に於ける諸天をも併せ稱したる用例の影響であるを論じ「原始佛敎と國民思想」(大西貞治、國語と國文學)は古代日本人の思想は佛敎の根本思想とは全然相容れぬものであつてその輸入に當つては可成の抗争を見たが然し之によつて沈滞した古代生活に新しい活氣を注入し問題に充ちた世界を提供したといひ「佛敎の同胞思想に就

り更に願文起請信義起請に分化し最後に傳授起請より神道者の神文を生じこれが土御門吉田垂加の諸派にて入門傳授及び書籍借用等に用ひられし例を考へたるが神社及資料の方面にては「上代史上に於ける國魂神」(宮地直一歴史地理)は古代史に見ゆる國土神を列舉し國玉・國御魂郡玉・生島・足島・皆同類にして國土の本質的靈的實在を崇敬する情念が固定して歷史上の人格神となり同時に國土經營の根本神に進化し地祇としての完全なる性格を獲得したるものなることを云ひ「錦津見神之宮考」(川本達歴史地理)は我國上古北種南下の大勢を海洋文明の狀態より對馬國仁位和多津美神社を海神の本宮なりと考證せるもの「明治初年の社格と准勅祭神社」(竹岡勝也、國學院雜誌)は明治初年に於ける神社行政殊にその社格制度を見て二十九社が勅祭せられ且つ御東幸により武藏十二社が勅祭に准ぜられ間もなく之を停止せられし次第を述べたものである又「八代國治氏の諏訪神社の研究に就て」(山口銳之助、歴史地理)は祭政一致時代には神は磐座に坐し其前に祠ありしが佛教渡來以後祠が神座に變つたといひ「京都に於けるお産の信仰」(若原史明、風俗研究)は

古今の信仰の有るがまゝに記すこて子を授け給ふ神お産の平安を守る神を列舉してその傳説を記し版畫天神繪は之が寺小屋の天神講に禮拜せられしならんこて浮世繪師が通俗教育、民衆信仰に貢獻したることを述べ「豊橋明神社の鬼祭と田樂」(喜田貞吉、歴史地理)は此の鬼祭は宇和島の鹿の子踊、庄内の獅子踊と同じく田樂の遺風なりとしたものである佛教史には寺誌に「近江粟太郡石居廢寺に就て」(島田貞彦、歴史地理)は土壇の礎石を發掘して七間四面の金堂址ならんこて其後方に講堂前方左方に東塔を推定し瓦、古錢等の出土品より建立は奈良朝にして平安中期以後再興せられしものならんといひ「四十八願寺趾について」(日下無倫、中外日報)は洛南三室戸寺の東北約三町の竹林中に散在する五輪塔と三室戸寺に藏する木額を調べて此地が四十八願寺趾なることを祿享保の頃まで現存せしことを證し「親鸞聖人稻田草菴址に就て」(藤原猶雪、觀想)は親鸞門侶の地理的分布を調べて常陸は眞宗發祥の聖地なりとし且つ稅所文書を考へて草菴址は稻田社所在の今の稻田若くは其附近に索むべきものなることを主張し「蓮如と堺信證院」(佐々木芳雄、

歴史ミ地理)は樫木屋道顯が文明二年道場を再建したるものが信證院ミなりたりミの説を正して信證院は蓮如が文明十年以前に創立し今の堺別院ミして傳はれるもの樫木道場は現今之に接する眞宗寺なりミいひ「角坊別院創立に關する一資料」(中山弑鷹、龍谷大學論叢)は安政四年西本願寺が洛西西院村字山之内に同院を開創するミき山之内村庄屋勘左衛門年寄新右衛門を通じて地頭相國寺に懸合ひたる事情を明かして本願寺の態度を狡猥なものであつたミいひ「太平山安國寺由來」(野田昇平、禪宗)は隅州加治木安國寺の由來、殊に文之和尙が我が文化に功績ありしミを記してゐる。其他密宗學報の後宇多法皇號に收めてある「後宇多法皇ミ東寺」(山本忍乘)「後宇多法皇ミ大覺寺」(淺井義明)「法皇ミ高野及高雄山」(小原洪秀)も參考ミすべきものである。資料の部では「法寶護持の史料ミして見たる日本金石文」(高瀬承嚴、佛教學)には百萬塔中根本陀羅尼より大和中之庄發見の承應四年に至るまで六十九種の納經の志願を述べし金石文を解説してあり「宗像神社の阿彌經石の研究」(西岡虎之助、歴史地理)は筑前宗像神社境内の阿彌陀經石は襄陽龍興寺に

建てられし隋の陳仁稷書の碑を宋代に模刻せしもの、一つを將來したるものなりミいひ「知恩院の古寫經古版經」(藤堂祐範、歴史ミ地理)は昨年十月知恩院に開かれた大藏會の陳列品中菩薩處胎經以下重なるもの三十三種に亘つて解説し「吉野山にて發見せる古寫經」(上田三平、同誌)は同地櫻本坊にある久安三年の奥書ある大般若經同じく弘安三年の春日版大般若經正應二年の頓寫經を紹介し「勅封心經について」(小田慈舟、密宗學報)は大覺寺心經殿なる嵯峨後光嚴後花園後花園正親町光格諸帝御宸筆の般若心經を觀奉つてその大御心を仰ぎ「院政時代の供養目錄」(三宅米吉、津田敬武)は明治三十九年京都市にて發掘したる供養目錄及び極樂願往生歌を讀解解説して何れも沙彌西念のものにて當時の佛教思想を知り得るは勿論假名遣の變遷を知るに善きものなりミし「打聞集解題」(山口光圓、龍谷大學論叢)は著者が江州金剛輪寺にて發見したる本書を、長承三年頃に寫された説話集で佛敎文學ミして 假名文字の發達上よりも參考になるものミいひ「三經釋ミ選擇集」の著作前後(今岡達音、佛敎學)は前者は後者の稿本ミなつたものであつて文治六年

の講説の時のノートに後人の附加したものと云ひ「選擇集の著作年代について」井川定慶、歴史と地理は建久八年冬草稿出来、九年春頃淨書出来としてゐる又「新出の法然上人繪傳(同人、史林)は大津より出たる釋弘願筆の黒谷上人繪を拾遺古德傳に近きものにて而も類本の見當らぬ貴重なものであるといひ「玉日の傳説と親鸞上人御俗姓集(日下無倫、佛敎研究)は玉日傳説は覺如の傳繪製作後幾くもなき時代に卷間に存したることを云ひその成立の過程が室町末期を下らず見ゆる近江泉福寺藏の俗姓集に依つて窺はるゝことを述べた。僧傳では「藥恒の年に就て」大屋徳城、史林)は新出の尊勝眞言異本勘定持誦切能唐朝日域興隆流布縁起に依りて天慶九年より長承二年の間の人なりとし「厭世詩人蓮禪(平泉澄、佛敎學)は、彼を木工頭藤原道輔の子資基として三外往生記は保延四五年阿彌陀峯隱栖中の著本朝無題詩は其の久安頃の編纂ならんことを考へ「往阿彌陀佛とその業續(橋川正、歴史と地理)は筑前鐘崎の築港と相模和賀江島の築造を説明して直接重源の思想を受けた人ならんことを推定した。其他「日蓮上人と富木氏(小林一郎、法華)は上

人と富木氏との美しき師弟の關係を述べ「後宇多法皇御年譜(土宜覺了、密宗學報)は御經歷を、「頓阿法師と聖岡上人(伊藤祐晃、摩訶衍)は、上人は最初上洛の際頓阿より歌道の口授與傳を受けて其の傳法組織に應用したことを述べた。尙柳宗悅氏が「木食五行上人研究」なる雜誌を發行してその生涯信仰藝術を紹介したるは猶中外日報が眞如法親王建碑問題を提けて「眞如法親王御傳について」(江藤澁英)等を發表せしに似てゐる「蓮體和尚(上田進城、密宗學報)は和尚の生涯を記して契沖と善く且つ巢林子に敎示する所多かりし次第を語り「了翁禪師に關する一異説に就て」大森金五郎「歴史地理)は淺草桔梗屋の山緒書にある錦袋圖の記事を疑ひて禪師は生前既に名望上り徳化四方に及びし人なりといひ「大典禪師年譜(小島文鼎、禪宗)は悉しき年歴を示し「海如和上の陰德行につきて」(田中海應、新興)は和上の手記なる功德衆によつて其の修法・讀經・寫經・施湯・施藥・放生・施俄鬼を行ひし次第を述べ「維新の志士琳瑞和上(石橋誠道、摩訶衍)「周防勤王僧月性に就て」(妻木直良、龍谷大學論叢)は、両者が幕末國事に盡瘁したことを記した。次に敎理及敎

儀の沿革については「初期の叡山佛法」(小林是恭、法華)は傳教大師は天台・眞言・圓戒・禪の四教を相承し、法華經の諸法實相説を弘布せしが覺證兩大師は密教を過取して教理の深化を計り、更に安然に至つては眞言第一、一大圓教の法界觀を立てて表面上法華中心の教學を大成したるも實は眞言密教に降伏したりと説き「光言と明惠上人」(服部如實、密宗學報)は上人を以て日本に於ける光明眞言信仰の先驅者となし其の之に關する四著書を解しその奥に華嚴の思想の流れ居ることを云ひ「一遍上人と日蓮上人」(今岡達音、佛教學)は、日蓮の觀心は西山の觀門三心、弘願より來れるものにて、その唱題も西山系の思想、而して之は文永八年兩者會見後の影響であるといひ「日蓮聖人の戒律」(船口萬壽、歴史地理)は上人に妻子なかりしことを辨じ「僧尼飲酒の辨」(喜田貞吉、同誌)は日蓮を中心として飲酒戒が漸次壞れたる次第を述べてある次に昨年は實如上人四百回寂如上人二百回本如上人一百回の忌に當つたので龍谷大學では三上人に關する史料展覽會を催し且つ三業惑亂に關する種々の研究を發表した即ち「三業惑亂年表」(西光義遊、龍谷大學論叢)は寶曆十

二年二月十一日越前淨元寺龍養の異解決斷より文化三年十二月十二日の本山御家中僧俗への御仕置仰出までの詳細なる日曆を載せ「寂如上人時代の本願寺」(禿氏祐祥、同誌)は上人は貴族的色彩の濃き人にて文事を好み、恰も江戸時代の本願寺に於ける康熙皇帝なりと説き「三業惑亂の大觀」(中井玄道、同誌)は智洞の能化就職を以て此の騒動の開幕とし享和元年二月の其回心までを第一期同年六月の學林派の上京より享和三年四月本山が二條廳に請ひて安居講釋休止を命ぜしまでを第二期爾後を第三期として其推移を觀察したるが其間の詳細なる研究は、「學林の立場より見たる三業騒動」(禿氏祐祥、同誌)「大瀧師の護法運動に就て」(富士川游、同誌)「三業惑亂に於ける環中師の立場」(能令實圓、同誌)「肥後に於ける桃華派の寺院」(佐々木憲徳、同誌)「芳英師廻心始末」(妻木直良、同誌)等の論篇に見えて居る。尙寺院の法制經濟等に關しては「寺院財の種類」(友松圓諦、佛教學)は平安朝以前の寺院財の目的、種類を考察し衆は宗と同じく教育・行政・經濟・供養の單位を以て用ひられし「佛敎經濟は利息を是認せしこと毫厘も明にされしこと等を述べ」「大寶令の制

定こ寺院制度」(禿氏祐祥、歴史地理)には、令制が神祇令僧尼令に重きを置けるは神佛の冥助によりて國家の平安を致さんこせしものにて其僧尼令は戒律の自治的なるに對し法的公的にて、此を保持する爲に僧綱を置きしが其の權限薄弱なりしめ効果を收むる能はざりし事を述べ「大覺寺こ永宣旨」(服部如實、密宗學報)は大覺寺は後宇多法皇院政の時僧官坊官を補任するの永宣旨を受けし傳あるを述べ坊官に法橋、法眼、僧侶に法印權僧正權律師等を與へしこをいひ「南北兩朝の對立」大覺寺」(中村直勝、同誌)はすべての物が南北何れかに味方して恩賞を得んこし諸寺も亦所領の關係より或は南或は北乃至は兩屬したる際に大覺寺のみは何等經濟上の理由なく終始南朝につきたるは後宇多法皇の信仰によるものなりこいひ「後北條氏」一向宗」(渡邊世祐、史學雜誌)は關東に偉大なる勢力を有ちたる一向宗に對し氏綱は敵こして迫害し氏康は初め緩和して利用せしが後甚しく壓迫し氏政は緩和し氏直は壓迫したる次第を述べた。基督教史に關しては「切支丹宗門の迫害」潜伏」(姉崎正治)は島原亂平定後より浦上信徒一件に至るまで二百年間の一般迫害の方

法、狀態、糺明の論點、有司の心得、對基督教觀、潜伏信徒の精神狀態、迫害に臨む場合心境等を論究し、殊に島原亂後の宗門根絶政策、寛文年間^{に於ける}豊後宗門事件には悉しき好著述であり「所謂南蠻守遺鐘の傳來に關する異說」(新村出、史林)は大正十二年川上孤山氏が得たる妙心寺春光院の南蠻寺遺鐘に關する古文書を考證して舊說に疑を容れる餘地はあるも未だ悉く此說によりて薩摩及び仙臺よりの傳來なりこ信するには早いこし「私こ基督教」(原胤昭、新舊時代)は氏が家庭の訓化によつて慶應二年基督教に入りてより明治九年日本人の獨立教會を立て十一年政府の壓迫を受けしまでの追憶を記したものである。最後に雜信仰に關しては「東洋に於ける星の崇拜」占星術」(森太郎、風俗研究)には土御門、幸徳井二氏が之に與りしこも、佛教は表面之を禁するも實際は説きしこをいひ「上古食肉の風俗」禁忌に關する考察」(植木直一郎、國學院雜誌)は我國の上古に於て或種の獸肉の喫食は一種の「Taboo」こして禁忌せられ、之が喫食は禁忌の侵犯、觸穢の行爲こして罪惡視せられ人も神も惡みしが文化の進歩こ佛教の影響によつて道德的宗教的

意味を強め竟に社會の禮儀制度となりしものと説き「源氏物語に見えたる物の氣に就て」(石村貞三、國語と國文學)は源語中の生靈死靈の憑崇、産時の異常精神の記事を觀察して當時が迷信深き時代なるを説き共に此の迷信も絶対に信じたる人のみにあらざることを述べたものである。〔徳重〕

最後に史料に關する研究を收めんとするが、まづ第一は大日本古文書中に收めらるゝ一文書に就て「但馬國正税帳の研究」(澤田吾一、史學雜誌)を企て雜用部の一目を還元慎補して其の計數的實質を完全なる記載を得たるに等しきものにし雜用全額は三萬二千三百三十九束弱なる事を計算し駄量及び人擔、運夫と貨税の關係を見、これらの運夫は多く貧民なりしだけに運夫として勞役に従事する事は一つの社會救濟事業なりとし、但馬に於て一千人若しくは一千數百人の運夫が文化隆昌の帝京に往復したるために精神上はた物質上或は社會上受けし影響は大なるべしと論じた比類少き努力の結晶である、これについて最近學界に紹介せられて學者注目の焦點となれる「九條家延喜式」のうち卷九・十の「卷即ち「神名帳」が

玻璃版として複製さるゝに至つた事は、また確かに學界の慶事であつて、それに附するに「解説」(宮地直一)を以つて本書の紙背文書が村上天皇天曆康保以後白河天皇の承曆に至るものである點及び其紙質筆蹟から見て矢張院政時代の寫本であらうと斷じ、流布本、出雲本と比して社格に異同あるもの、社號に異同あるもの及び社名に異同あるを列舉して居る、別に「神名帳に就いて」(同人、國學院雜誌)があつて一條公爵家の延喜式が王朝末期を下らない古寫本であるとし、卷一より卷五に止り神名帳を逸した事を遺憾とするがこれら神名帳が幾分なりとも今日に保存さるゝに至つたのは天台眞言法相等の古い宗派で神分法樂の行事を修しその節その寺に關係ある諸神を道場に招請する必要上から保存されたのであるとして居るものがある。またその神名帳の最後の注釋書であつて明治初年致部省の非常な努力により當時の碩學を網羅して編纂せし「特選神名帳」の稿本原本が關東地方大震災のために焼失したので、その僅かに残つた寫本を基として刊行されたのも偶然かも知れないが首尾相應じた現象であつた。古來幾多の舞樂に用ひられた詠嚮はたゞ五常樂

には詠の音譜が存して居るが詞句は傳はらない云状態であつたけれども春日神社の所藏に歸した樂記の中に妙音院師長から傳つた「輪堂の詠」(出雲路通次郎、歴史地理)の唱歌が存して居つて其詩句の發音及び音譜まで記されて居つた事はたゞ世に絶えたに聞いて居る詠の一端だけでも知る事が出来ると言つて居るのを併せて共に平安末期の一史料として尊重すべき報告であらう。時代や、降りて「園太曆について」(山君橋小彌太、同誌)は園太曆百二十餘卷は公賢の没後公數に至つて家名中絶した際中院道秀に買ひ取られ其時に應長元年夏より康永二年までを逸して居る、それを甘露寺親長が抄録し首に洞院系圖を冠し三十三冊としたのが世上に流布した、而して其の抄録の程度の一般は神田氏所藏の原本と比較する事によりて知らるゝが其れは可なりの程度に抄略してある事を述べたものや養堂周信が嘉慶元年に跋文を加へて重刊せしめた近江長濱笹原氏所藏の「和點本の古版法華經について」(禿氏祐祥、同誌)研究を加へ、その募縁刊行者である約齋居士道儉は至徳三年に心空の著である法華經音訓をも刊行せしめた左京兆通議大夫でありその校定

者である心空はその他にも法華音義上下を著した善法寺の住侶であるに斷じ此和點本の刊行は此兩人の協同事業であつた事を明かにしたものはまた南北朝前後の史料に就ての論考であるし、また「正徳信使改禮の『教諭原本』(武田勝藏、史林)に就て説明し鳥子縦一尺七寸横三尺五寸の用紙に新井白石自筆の謹直なる楷書で書かれ年號の所に方約三寸三分、印文小篆陽刻「救命之寶」なる極めて莊重にして精粹な朱印が押捺されてある事を記したのも注意に値する史料であるまいか。

翻つて思ふに先年の大震災は幾多の史料を一朝にして灰燼に歸したもので吾人文獻學の徒にこりては頗る損失であるだけにその痛ましき災害を慨き戦き「東京帝國大學圖書館にて焼失せし貴重書」(植松安中央史壇)、狩野博士「其珍書」(大森金五郎、同誌)、「災餘錄」(黒川眞道、同誌)に於て焼失せし文獻を吊ひ「文獻之記録」(大森金五郎、同誌)が東京帝國大學附屬圖書館國漢文貴重書目録、同郡村誌日録、日本大學貴重書目録(西洋書)を収録された努力は吾人よりの多大の感謝を受けるに充分であらう此の大災厄に遭遇した誰しもが思ひ起す事は「應仁の大亂

と一條家の記録文書(同人、同誌)の焼失であつてその状況を講述したのも決して徒勞の業ではない。かくて此大災厄が與へた教訓によつて文献の複製保存が著しき勢を以て企てられた事は吾人をして悲痛の中よりある輝かしさを感じしめるものであつて史料編纂掛が古簡集影題して伏見宮家の「紀家集斷簡」及び九條公爵家の「弘仁式主税上斷簡」「律斷簡」「後漢書斷簡」を古典保存會が、眞福寺本古事記「大福光寺本方丈記」「醍醐寺本水言抄四、五」「法曹類林卷第百九十七」「日本國見在書目錄」の刊行を完成して更に第二期の事業に著手したる名古屋温故會が「眞福寺本尾張國郡司百姓解」「温故雜集第一輯弘法大師御入定勘決記」を何れも玻璃版にして刊行したるは史料編纂掛の「古文書時代鑑」と共に學界のために裨益する所鮮少に非るべく、日本史籍協會は「戊辰日記」「三條實萬手録」第二、「維新日乘纂輯」第一、第二、を出し「大日本古文書」は「家わけ第八毛利家文書之四」「家わけ第九吉川家文書之一」「幕末外交關係文書之十七・十八」「大日本史料」第一編之三、第五編三・四、第六編之二十一第一二編之二十五、「史料綜覽」卷二を出版した。續群書類

從完成會は毎月一冊宛の刊行を續行し「國文東方佛敎叢書」の刊行が開始せられて珍奇なる史料を收載せる事は「日本國誌資料叢書」(太田亮が丹波、丹後、近江、武藏攝津、河内、和泉の七ヶ國を發兌せると共に初にも述べた如く漸く我國學界の進歩の次第に當惑に復せんとしつゝあることを物語るものではあるまいか。〔中村〕

朝鮮史 日進月歩の我が史學界の趨勢は朝鮮史方面に於ても亦相當の進境を示した。先づ特種問題に於ては「高麗元宗朝の廢立事件と蒙古の高麗西北面占領」(池内宏、東洋史論叢)の史實を闡明し林衍が元宗を廢立せしことは西北面兵馬使の下僚崔垣が蒙古に内附したる爲にその機會を作り之が林衍誅伐の名の許に元の世祖をして西北面に出兵せしめ東寧府設置を出現したるを説き「弘安の役と高麗」(青山公亮、史學雜誌)の關係を研究して元の對日本政策の停頓が高麗に不安の度を増さしめ其の上造船命令は發せられて武斷主義實行となりたれば自ら高麗に消極的國力擁護政策の發達を促したことを謂へるがある。朝鮮人の白衣に就て(松田甲、朝鮮)は魏志夫餘の條に夙にこのこと見え東國通鑑忠烈王元年並に李朝の鄭元

容の文献撮録等に之を禁止する命令見えれば蓋しこれ高麗時代佛教の隆盛に關係して創まりたるものかを疑ひ「朝鮮に於けるシヤマニズム」(孫晋泰、東洋)の家族的職業的現狀を察して土俗學的立脚地より見んことを「新羅王の世次」其の名につきて「前間恭作、東洋學報」焯知王以前の二十一王をば文武王碑文より考證して奈勿、實聖、訥祇、慈悲焯知、知證と六廡立干の實在を確かめ以て新羅創國の奈勿時代にあり奈勿以前の上古十六王は朴氏三代の間に偽作せられたるものならむかを論じ金車降誕、三皇、金櫃降誕の諸傳説を解剖批判せる、黨争が廢主燕山君以來頻發せし士禍に起因する新説を提出し其の發端を沈義謙金孝元の反目に歸すべしと「朝鮮黨争の起因を論じて士禍との關係に及ぶ」(瀬野馬熊、東洋史論叢)もの皆興味ある論文であるが「龍歌故語箋」(前間恭作、東洋文庫論叢)「鷄林類事麗言考」(同人、同)も亦苦心せる有益なる研究である。經濟史社會史方面に於ても「朝鮮社會史の断面」(稻葉岩吉、東亞經濟研究)を概論して地理的位置が深刻なる征服を受けざりし爲に階級制度家族制度皆停頓し庶孽防限の如き古風行はるゝを指摘した

る、小麥、大豆、粟稗甘蔗棉麻類の現狀を調査したる「朝鮮の農業金融組織」(河田嗣郎、經濟論叢)及び「朝鮮の雜種農業」(同人同誌)、自然地理經濟地理歴史地理等の方面より「朝鮮の地方的研究」(小田内通敏、朝鮮)の必要を力説せる、古くは「日麗通商管見」(青山公亮、東洋史論叢)の論結として高麗文宗の初年より交通せし對馬よりの我貿易船に進貢船の色彩強く高麗が漸次之を拒絶する傾向ありしことを謂ひ得ること、近くは「李朝以降に於ける朝鮮の人口」(善生永助、東洋)調査が正祖十三年より肅宗英宗時代頻次に行はれ其の結果として京畿道を境界として南鮮は密度高く西北鮮は低き現象の讀め得ることを明にしたるもある。次に歴史地理には百濟高句麗の古地名を研究して一昨年以來發表せし「三韓古地名考」(坪井九馬三、史學雜誌)を完結したる、並に「三韓古地名考補正」(同人、同誌)に對し之を補足助成したる「三韓古地名考補正を讀む」(鮎見房之進、同誌)の如き地名研究もあれば「樂浪帶方二郡の遺民」我が上古の文化」(木宮泰彦、歴史地理)との關係を調査し秦人漢人の故郷を論じ「高句麗の平壤城及長安城に就て」(關野貞、朝鮮)長壽王の都し

た前者を大城山ミ酒巖ミを結付けたる場所ミし平原王の都した後者を今の平壤なりミ遺蹟研究より論斷したるもの、再南鮮に於ける文祿慶長の築城に就いて「伴三千雄(歴史地理) 東萊城趾を甌山城、南海城趾を流山島ミ決定したるこミ及び巨濟島の見乃梁城趾を確かめたるこミなきを述べたるは、山城、面、里、洞、谷、村、倉、昌站等數十項に亘り其の各の緣由を研究せる「朝鮮地名の考説」中村新太郎、地球)ミ共に好文字たるを失はぬ。若しそれ内鮮史的關係に至つては「日鮮文化の歴史的差別に就て」稻葉岩吉、朝鮮)家族制度政治的見解にて兩文化の懸隔略六百年の遲速あるを指摘したるもの、「内鮮儒學關係藤原惺窩ミ姜晳隱」松田甲、朝鮮)の關係を内鮮の史料より述べ姜沆が慶長四年惺窩に面會して我が儒學界の啓發に刺戟を與へ惺窩點の四書新註を公にせしめて朱子學を宣傳せしめ看羊錄に相國寺妙壽院にて舜首座即ち惺窩ミ面會し文事を談したる記載の細なるこミに論及したる、東國通鑑所見の新羅の朴陞上が允恭帝の時渡日せる話より東文選所見の高麗の鄭夢周の渡日、李朝初期の申叔舟の渡日皆博多に來り廟家臺の文字ミして現はる

こミを謂へる「博多ミ朝鮮人の事蹟」松田甲、朝鮮)なきがある。傳紀の研究には文祿二年晋州落城の際加藤軍に助けられたる當時十三歳の餘好仁が日本にて修業し二十九歳にて熊本本妙寺に住職となり天賜の紫衣を纏ひて「日本教化に大功ある朝鮮出身者本妙寺日遙上人」松田甲、朝鮮)其の進轉不住の見識ミ不屈の霸氣は諸宗章疏の刊行圓宗文類、刊定成唯識、等を著はし高麗佛教に重要な智識なる「高麗の大覺國師に關する研究」内藤雋輔、支那學)なきあり藝術方面には「朝鮮古陶磁の特質ミ源流に就て」(小村俊夫、東洋)は高麗青磁が宋の龍泉窯に範をさり其の紋様に西域分子あり三島手は之を踏襲して手法の簡單となりしもので宋の越州窯の分子濃厚に鞏手は古埃及の硝子練の手法を學びたるものなるを考證し「朝鮮の美術工藝」(關野貞、東洋史講座)は樂浪時代より古墳發堀品につき評論し古新羅及伽耶時代新羅一統時代に至る建築彫刻工藝調度品に亘り博大なる敘述をしてあり此等の遺物遺蹟に基く研究は即ち支那古代の該方面を髣髴類推する參考資料なれば其の學界に寄與する所當に朝鮮史のみに止まらぬ。以上は昨年度斯界の大觀である

〔那波〕

東洋史 昨年度の我國斯界にて特筆すべき三項がある。

一は東洋史普及の目的を以て生れたる東洋史講座の活躍
二は東洋文庫より東洋文庫論叢書と稱する叢書の刊行、三
は白鳥博士還曆紀念東洋史論叢の刊行である。就中後の
二者は専門學者に大裨益を與へ學界の進運に多大の貢獻
を爲した。之を外にしても斯界逐年の發達は研究細より
微に入り研究方法愈々科學的に向つて來た今先づ一般
的方面より大觀するに「太古より後漢末に至る」〔橋本増吉
東洋史講座〕、「後漢末より南宋の中世に至る」〔中村久四
郎、同上〕「蒙古の勃興より明末に至る」〔高桑駒吉、同上〕
「清朝初世より現代に至る」〔松井等、同上〕概説は夫々約
八割を講述し「古代印度の文化」〔武田豊四郎、同上〕「支
那畫の研究」〔梅澤和軒、同上〕「支那文字の研究」〔中村不
折、同上〕「支那建築史」〔伊東忠太、同上〕「近代西藏史研
究」〔矢野仁一、同上〕「支那港灣小史」〔藤田豊八、同上〕
「支那小説」〔幸田露伴、同上〕或は概説に或は独自の研究
に並に東洋史學の普及と發達とに貢獻し、「東洋學研究の
必要」〔井上哲次郎、東洋〕の提唱は近來東洋學を輕んず

る一派の青年に痛棒を加へ、「東洋文化の反省」〔松井等、

東洋〕も亦東洋畫に西洋畫に見るべからざる救ひあるを
例として西洋文化が分析力の上に根柢あるに對し東洋文
化は綜合力の上に根柢あり精神文化にて優越せることを
論じ「對支文化事業と吾人の之に對する若干の希望」〔田
崎仁義、商業と經濟〕を述ぶるや支那に於ける反對の聲
を批評し研究資料の蒐集保存整理、複製出版頒布、文字
研究の必要を論じ「對支研究と我中等教育」〔西山榮久、
東亞經濟研究〕につき主として地理教科書の記述の不完
全なる諸點を列舉し、直省首府軍鎮の字義等を述べたる、
「國際支那史」〔大矢信彦、支那研究〕の支那各朝の疆域と
亞細亞諸民族との關係を述べたる、「支那の國情と日本の
對支策」〔長瀬原輔、文明大觀〕を論じたるものあり政治
問題には「支那の帝政と文化」〔矢野仁一、經濟論叢〕は支
那帝政が道德禮教の徳治主義にて法律の實行を期せずそ
の道德禮教こそ支那文化にして帝政の滅亡と共に支那文
化も滅亡したるものとし「支那の社會の固定性」〔同人、
同誌〕は大多數の庶民階級が政治を無用視して被治者こ
なり其の無抵抗主義は容易に平和の擾亂せらるゝ原因な

ると同時に容易に平和の恢復する原因なりとし、「支那の共和政治の成立及び建設(同人、同誌)は勿論清朝の滅亡に緣由すも清の滅亡は歷朝の滅亡と異なりて實にこれ帝政の滅亡したる結果に出で徳治主義の餘波が今尙ほ共和政に諸種の困難なる要素を遺せるを指摘して居る。

古く母系を示す姓を古代社會統制の單位なりし同一宗族の政治的團體と見、天命説、感生帝説を後世の僞作とし帝王と民意との乖離せし所に聖人を生ぜしめたるを謂へる「支那太古の治者と被治者と中間階級(上野充一、支那研究)、殷代の頻次の遷都は遊牧の習慣より緣由し周の封建制は農業の發達せし證左にして同姓諸侯の分封は本來の民族的部落の性質精神を保持して威力を持続せむが爲なるを謂へる「支那古代の封建制度(橋本増吉、東洋史論叢)共に類似の問題であり「北岳恒山の祭祀(井上以智爲、歴史と地理)は漢武帝に始まり宣帝に常禮整頓せしも之は政治的祭祀にして到底東岳の道教の祭儀の盛に及ばず「明の太祖の教育勅語に就いて(和田清、東洋史論叢)朱元璋の下せし六諭が實行せられし證として里老が郷里を自治的に處理する規定の教民榜文第十九條に此

の事見ゆるを指摘し里老衰へて後の郷約の制は北宋末呂大臨の行ひたる制なるを謂ふ。南京條約以前の治外法權問題(矢野仁一、經濟論叢)を討ねれば徳治主義の一貫する處法の條文よりも法の精神を重んじたる爲治外法權を認むるを便して許容したる例の夙に存するを見る但し未だ外國人の權利として認めたるものではない。こはウイロビー博士の日本警察署論より支那外國警察領事裁判權の是非を論じた「支那に於ける外國警察權(古賀元吉、支那研究)に關聯して考ふべき問題であらう。若しそれ「近代蒙古史研究(矢野仁一)は近世支那の政治外交史に通曉する著者の十數年來の蘊蓄にして蒙古と清朝との複雑なる政治的經濟的宗教的關係より清末の蒙古の新政施行、露支蒙相互の關係、一九一一年の蒙古の獨立始末、其の後の露支蒙關係を説明し營に東洋學界に有益なる論著なるのみならず又實に經世の最良參考書である。次に經濟方面では「商書周書に見はれたる政治經濟思想(田島錦治、經濟論叢)が商に農政を重視し天人關係を信じ周に食政貨政を重視し人を貴び物を賤しみ殊に奢侈物を輕んじたる痕あり、龜甲文より「殷代の産業に就いて」

(小島祐島、支那學)見れば農業盛に行はれたる爲狩獵生活の周人に容易に征服せられたることを證し、「支那貨幣の進化に就て」(田中忠夫、東亞經濟研究)は天然非金屬低價非鑄造無單位獨立粗製貨幣より人爲金屬高價鑄造有單位代表精製貨幣へ進化したる經緯を明にすべく、「支那古代代制考」(橋本増吉、東洋學報)は孟子の貢助徹法を戰國時代の思想に基き作成せし説とし井田法も亦孟子一派の理想案にて共に氏族的部落共有時代の制度として認め難きを謂ふ。唐宋の文獻に見ゆる「車坊に就いて」(加藤繁、同誌)は之を貸馬車屋と解し「支那史上に於ける公私債務の免除」(同人、史林)の沿革を討ぬれば早く漢代に公債務を免じ五代頃より私債務をも免して居り、これ多數の貧者が少數の富者に對して跋扈したる現象にて一度北宋時代に絶えて南宋に復慣行せられて居る。唐宋時代の倉庫に就いて(同人、史學)邸、店樓、廓、塌房、堆棧場の倉庫なるを論證し管巡廊錢が保管料の意なるを闡明せるは、「唐宋時代の商人組合」(行)に就て(同人、東洋史論叢)之を同業商店の町と解しては兩京新記より見え同業商店の組合と解しては宋史食貨志至道年間の記載

より見ゆるを謂ふと共に今も廣東方面に尙ほ形骸を存せるを謂へると共に興味ある問題である「明代の草場」(清水泰次、東亞經濟研究)は永樂四年以來整顿せられしが弘治十三年李源の調査にて直隸山東河南に亘り元來十三萬三千餘畝のものが六萬六千餘畝に減少したるは馬政の變化せしが爲であり「明初の開墾と莊田の發生について」(同人、東洋史論叢)方孝孺の井田案は思想に止まり蘇琦のは學說に止まりしも太祖は實用的なる開墾を獎勵した。元の至元廿六年會通河成り同十七年より膠萊運河の計畫あり伯顔の疏河救荒議に基き劉家港よりの海運を經營せしが、明代は水面下に暗礁たりし海門島の爲之が發達を妨げられたる「元明の海運について」(藤田元春、歴史と地理)の研究、「蒙古征歐の英國に及ぼせる經濟的影響」(杉本直治郎、同誌)として英國沖の鯁漁中絶し鯁價暴騰せし現象「支那に於ける借家慣習」(田中忠夫、東洋)につき北は奉天吉林より南は江蘇浙江、西は陝西方面の事情を述べたる、固有風歐洲風折衷風に三別して「支那の都市」(西田與四郎、地理學評論)を論じたると共に有益の論文たるを失はぬ。「日滿關係の過去現在及將來」支那に對す

る門戶開放主義(以上經濟資料)寧古塔を中心せざる東北部滿洲之沿革(哈調資料)亦參考に資すべきである。次に交通史では南海寄歸傳大唐西域求法高僧傳に基き、「義淨三藏の行蹟について」(永野知周、龍谷大學論叢)地名を研究したる、「往古に於ける上海と日本との史的關係」(新村出、經濟論叢)を探り南宋の淳熙十年紹熙四年の日本人漂着より慶元六年蘇州平江府への潛流民來着を述べたるあり、歴史地理方面にては「安西四鎮の建置とその異同に就いて」(大谷勝眞、東洋史論叢)唐の貞觀十四年安西都護府設置せられ之が中絶後永徽二年に再設せられたる經緯並に四鎮は碎葉城を收めて安西都護府の治下に隸屬せしめし後に定まりしこゝを研究せる、「北岳恒山の北岳廟」(井上以智爲、歴史と地理)が初曲陽に近き大茂山を指し北魏以來大白渾源地方に延長せられ明以來故意に渾源主峰説が高調せられたる沿革、「河源に就いて」(藤田元春、支那學)一八八四年五月 Pejevally がオドントラ即ち星宿海に達せしこゝより河源に對する積石崑崙山説を批評し、元代を絶頂として乾隆時代より漢代の舊説有力となりし經緯を述べたるあり、「漢と西域」(大矢信

彦、支那研究)との交通地理的關係の概説もある、宗教問題にも「古代支那人崇拜の小神特に五祀に就て」(浦川源吾、哲學研究)淮南子白虎通の門戶井竈中霽の井が月令呂覽禮祀祭法に行きなれる理由を論じて金鵝の考古錄禮説の主張を是認し此等の信仰の心理的根據を五行説に歸せるあり又「太一について」(津田左右吉、東洋史論叢)之が陰陽の二つを一に歸せむとする所より考へられたるもので道家説に起り楚辭九歌にて神名となり漢武帝頃より天神中の最高神と考へられ宗教的性質を帶ぶるに至りしを謂へる、「シャマン教の世界觀に表はれたる佛教的要素に就いて」(圈下大慧、同上)其のシャマンの名を佛教の Sramana 其の天國十七層説を佛教の須彌山 Tushita の Mandushia は佛教の曼珠室利より來由せるかを疑へる、明清鼎革より康熙年間までを支那回々史のルネッサンスと命名し「明末清初の回儒」(桑田六郎、同上)王岱輿以下の略歴を述べ Orville Zwerner 兩氏の著述の誤謬の點を指摘せるはアヂサカに基きて西紀後七八年印度より僧侶の渡來し「ジャバの佛教に就いて」(ラバートン、佛教研究)基を定め現にカラサン寺の遺物もあり印度的色彩極

めて濃厚なるを覚え、前後一千年間の「爪哇佛教史の研究」(藤井周慶、同誌)の輕視せらるゝ現状を嘆じたるなきがある。言語文字研究には金の滅亡後滿洲字の成るまで尙三百年間女真文字の行はれ女眞の進士題名碑たること疑なきことを證明せる「宴臺金源國書碑考」(羅福成、

支那學)、今の直隸林西縣内蒙古の巴林と烏珠穆沁との境上白塔子より北東二十五支里なる *Varin-Mana* の遼の道宗陵より一九二二年七月廿一日に發見せられた「契丹文字の新資料」(羽田亨、史林)をば大金皇帝都統經略郎君行記の文字と比較研究して共通する點あるを指摘し從來女真文字なりと稱せられたる郎君行記が或は契丹文字と解さるべきものかも知れぬと謂ふ提案を爲したるは學界に衝動を與ふる研究であるが、「敦煌發見摩尼光佛教法儀略に見えたる二三の言語に就いて」(石田幹之助、東洋史論叢)Stein 發見の該書中の佛夷瑟德烏盧訛を *Pahlavi* の *frstac rokan*、薩波塞を *ispasac*、默奚悉德を *mahsrag*、阿羅緩を *xrohxvan*、釋沙嗒を *myosac* の音譯として考證せる、說文古籀補の小學の研究上の誤謬を指摘せる「金文編序」(羅振玉、支那學)元の周德清の中原音韻を研究

攷定したる「攷定中原音韻」(石山福治、東洋文庫論叢)なき、何れも興味が深い。吳音漢音問題については「古代支那の吳語吳音に就いて」(中村久四郎、東洋史論叢)と「漢字三音考評論」(滿田新造、國學院雜誌)あり前者は穀梁傳より號從中國名從主人の原則が慣行せられたると爾雅方言左傳所見の吳語吳音をあげ吳語と概稱するものにも春秋時代楊雄時代郭璞時代晋以後、南宋以後、現代の別ありて此の中には北方中原音の南傳せしもの多く、これ北方中原文化が吳地方に至りし證查するに足るを謂ひ後者は本居宣長の吳漢梵音の研究を批評し殊に梵語漢譯にて語尾の R に入聲の尾を利用することあるに氣付きたる卓見を賞讃して居る。風俗にては先づ「西域發見の繪畫に現はれたる服飾の研究」(原田淑人、東洋文庫論叢)を挙げねばならぬ、之は該繪畫に見えたる支那人の服飾と西域諸國の服飾とに分類し支那の法服一般服飾武裝、高昌の服裝焉耆龜茲于闐の服飾をば敦煌發見の佛菩薩以下燕樂の古畫に徵證して記錄上不可解なる細部の詳細を圖示し、參考資料として挿圖六種圖版四十一葉を加へ凡そ隋唐時代男女士庶の服裝、冠帶結髮巾幘の類一々之を

闡明してある。「支那古代殉送の風習に就いて」(重松俊幸 東洋史論叢) 詩經秦風黃鳥の詩以來之が見え秦にて比較的遅くまで行はれたるとより西京雜記所見の戰國時代墳墓の發掘の結果に徴し又明初の帝陵にも殉死者合葬の風あるを説き此の風俗の起原を死者の未來生活に對する準備の顧念と死靈惡靈を畏敬して之を避けむとする觀念に求め、「支那婚姻五則」(田中啓堂、東洋)として婚儀冥婚典妻賣妻租妻を歴史的に詳述し浙江地方には現代にも尙ほ賣妻の風盛に行はるゝことを謂つて居る。思想方面は先づ儒につきて「儒教成立史上の一側面」(津田左右吉、史學雜誌)は六藝を孔子の刪定述作に非ざる假托なりと斷し儒家が古く孟子荀子論語を經典と目せざりしは孔子の學統に屬する者が孔子と關係なき思想を取り入れ却つて孔子の本色が損はれたるに緣るを以て、漢代の史實より先秦時代の様子を推想し詩書は儒家より出でず戰國時代の儒者の言説と態度とは孔子のそれと遙に趣を異にせり。と斷じ「儒家と道家との交渉について」(同人、東洋學報)は前漢人の老子は老聃を指すも老子の書は孟子の書より後に製作せられ所謂老子は後世道家の輩が儒家の上に立

たしめむが爲の假設人物となし荀子の説にも儒家の傳統的的精神たる教化主義を有すると共に禮樂人爲説と天の思想にて老子に負ふ所深きを説いて居る。秦が西に位し周が秦の東方に位し火徳の周に勝つには水徳者たるべしとの説有力なりしと始皇が法治主義を採用するに當り五行説を利用したるが爲秦が受命の正統なる説を生じ、漢の火水土徳説は文帝時代より論議せられ劉向父子の提唱にて火徳受命説有力となり後漢光武帝の建武二年に至り之が確立せる經緯を論ぜるは「秦漢の受命と五行説」(箭内互、史學雜誌)であり「朱子の禮論に關する一考察」(後藤俊瑞、哲學研究)は朱子が禮を恭敬辭遜の理と社會現象として存在する俗に所謂禮の意との二種に使用せることを檢出し人情に基きて外面的形式を定め受禮者の幸福を顧慮し時代に適する様制定して本始を忘れず往來あらしむることを主張せるを謂つて居り「程朱の理氣説に關する二三の考察」(宇野哲人、哲學雜誌)は朱子の理氣二元論楊志仁の理氣先後論吾人の見聞に基く氣一元論、陸象山の理一元論の説の起る所以を説き「儒教倫理に於ける恕の意義と其道德的價值」(後藤俊瑞、同誌)は恕が己

の眞、萬人に普遍妥當する欲求又は拒斥を他人に移入し他人が出来るだけ多く實現し得る様に自己の行爲を規定しゆくこゝなるを謂ふ「白蓮社の復興運動」(佐々木功成龍谷大學論叢)が唐代蘇洲の智瑛の結社、吳郡の神皓の西方社、永州の龍興寺の淨土院に出現し宋代の省常の淨行社、遼式の淨業會、知禮の念佛淨社等起り、就中東掖山の白蓮社、超果寺の蓮社、歸宗寺の青松社は復興運動の顯著なるものを見るべきこゝを主張して居る。若しそれ特種問題研究に至つては愈々出で、愈々多種類である今其の主なる者を概見するに先づ「歴史上より見たる南北支那」(桑原隲藏、東洋史論叢)なる雄篇がある。之は春秋戰國より西晋まで支那文化の中樞は北支那に在りしが東晋の南渡南北朝對立にて南北支那に顯著なる相違を生じ隋唐の一統後江蘇安徽浙江江西湖北方面は一層開發せられ福建廣東方面も宋の南渡後開發著しく支那文運の絶えず南進せるを見るべく人口戸數は勿論都邑の存在より見ても東晋以後南方に大都會を出現し金陵の繁昌は長安洛陽に比肩し唐代の揚州は繁昌當時天下第一に位した。物力より見ても南方の穀物は北支那人の入用を負擔し上

古より中古中古より近代に南支那が總べての點にて北支那を凌駕せしこゝを論じ其の備考八十三項はまたそれぞれ小論文を爲すか或は研究問題を提供して學者に刺戟を與ふるこゝ甚大である「南人北人」(大矢信彦、支那研究)は南北支那の別に對し淮河説を主張し、「支那民族の起原に關する一説」(西山榮久、東亞經濟研究)は米人 Thomas Williams の Sumerians 起原説を一九一八年四月の華府人類學會雜誌に發表せるを紹介批評し、後漢に至りて具はりたる「漢碑の様式に就きて」(市村瓚次郎、東洋學報)碑身碑趺碑穿碑爺を論ずるや塚本白鳥兩博士の碑穿の説を駁して之が圭の様式に學びしものならむこゝを水經注の圭碑の名を古く瓊珠と稱するこゝより立證し、「西域研究」(藤田豊八、史學雜誌)は薩寶を梵語の Sattva の音譯として賢愚因緣經中の薩薄を引きて立證し、海軍を Gallos、吐谷渾を Hungos の音譯とするなどの創見を提出し、「左傳に現はれたる女子」(本田成之、支那學)には人格を認め難く貞操觀念全く缺如して居る。「支那天文學の組織及び其の起原」(飯島忠夫、東洋史論叢)につき左傳國語所載の木星の位置は劉歆の三統曆を以て

推歩附加したるもので干支は西紀前三四世紀頃に西洋より傳はりたるものなれば龜甲文金石文經典文にして該時代以前の干支ある記載は皆該時代頃に潤色せられたるものなるを謂ふは支那史研究上の重大問題として注意すべきものである。東洋の「尺の研究」(藤田元春、史林)を試むる時孫子に十進法淮南子に十二進法の記載あるは興味あることにして隋書所見の晋前尺以下七種、狩谷掖齋の調査せし我が叡山尺以下八種、漢書律歷志の荼筭銅籥尺以下五種、唐大尺、正倉院御物牙尺以下廿一種を比較するに時代を降るに隨ひ一尺の長さの延長せし痕迹の歴然たるものあり而も概ね十二分の一宛の延長なるは古代支那に十二進法の風の存在せる痕迹あるに合せ考ふべき問題である「支那に傳ふる二三の Myth につきて」(藤田豊八、東洋史論叢)楚辭天問の巨豷負山が古印度の掘海、蝕十日並出が又印度のそれと各々相通する所あるを比較し印度傳來のものならむことを推想せる、漢より六朝迄、Dambax tree の果彙より製せし桐華布、gossypium plant より製せられし白疊布を知りし「棉花棉布に關する古代支那人の知識」(同人、東洋學報)が後代に降るに及び愈

々廣くなり榻布、答布都布は波斯語 Bagak, Bagak の音譯にて古終、婆羅、兜羅古貝吉貝却貝、婆育何れも木棉織物なるを論じたるがある。續指南車考補遺(橋本増吉、同誌)は Montle の説が lies の説の誤謬を補正する價値あること、Soume は西紀前三世紀迄も上せるも支那人の指南車は漢代まで磁針は宋代までか溯源し得ざることを主張し「千秋節宴樂考」(原田淑人、東洋史論叢)は玄宗の每千秋節に行はれたる小破陣樂舞馬戲象及犀、鬪鷄戴竿伎、山車旱船角觥につき古畫に基き記録を調べて之を考證し「蒙古の詐馬宴と只孫宴」(箭内互、同書)は皇帝の上京駐蹕中毎六月三日に開かるる前者、凡そ宮中の大宴にて參列者が一色服の後者につき周伯琦の同物異名説を駁し前者が原野に散逸する群駒を蒙古諸王公子が訓練する妙技を樂しむ宴なるを證した。杭州西湖畔の茶の名産地、龍井と茶(那波利貞、歴史と地理)との關係、該地の現状、辯才大師元淨の履歷を述べたる、敦煌出土の大隋求陀羅尼が大隨求陀羅尼の誤にして永徽六年阿毘達磨大毘婆娑論の刻本は疑はしく、Wes博士發見の咸通九年刻金剛般若經、文宗大和九年に民刻を禁ぜしことを論じ

て「支那に於ける印刷術の起原」(神田喜一郎、同誌)を論じ、たる「支那都邑の城郭」(其の起原)(那波利貞、史林)を論じて周の洛邑の如く當初より築造するもの、漢の長安の如く後に築造するものあるを指摘し邑或の原始的意義に城郭存在の痕迹の認め難きとを證明し都市の城郭が殷の盤庚時代より起りしならむを提唱するあり「大金國志に見えたる愛王の亂に就いて」(鳥山喜一、東洋史論叢)之が金史に見えざるは金に對する漢人の反感復讐的心情が劉全等の事件にヒントを得て鄭王の王子に事を托して作爲せしが爲なるを證した。唐の陸羽李季卿張又新の品水、蘇軾の十六湯品等の「喫茶」評水(那波利貞、歴史と地理)の歴史を調べたる、秦より宋の淳熙十二年までの「漢族の文献」に現はれたる牛異(伊能嘉矩、東洋)を列擧したる、漢匈奴患適戸逐王の印、古録の肖法疾の文字を考證したる「梅華堂印賞序」(内藤虎次郎、支那學)録印所見の都司都司徒左右司象鐵治官王之上士等が史の缺を補ふに足るとを謂へる「霽々莊印譜序」(同人、同誌)「四庫全書總目」の廣韻の提要につきて「岡井慎吾、同誌)重修本が却つて古き書なることを證明せる皆有益の篇であ

る。「支那近代史年表」(黃炎培、支那研究)も亦一顧の價なきにしもあらず。藝術方面にては張芝、鐘隸王羲之、より歐陽詢、顏真卿柳公權、董其昌までの「支那書道史」(岡田忠一、東洋)を概説せるを外にすれば北宋時代の輕佻浮薄の風氣より徽宗の人物を論じ當代の畫風宣和の畫院の事情徽宗の畫技書畫骨董の蒐集を謂へる「風流天子徽宗皇帝」(那波利貞、歴史と地理)は半は社會世相史にも亘れるも「宋代畫論畫史の書」(瀧精一、國華)や「千闕國王李聖天」(莫高窟)(松本榮一、同誌)は純粹の畫の研究にして、前者は荆浩の筆法記山水畫論黃休復の益州名畫錄より郭若虛の圖畫見聞法が支那にて明瞭に人格主義の提唱をなせし最初とし、以て鄧椿の畫繼に論及し、後者は莫高窟の壁畫製作の由來より此の王の功績を論じ燉煌出土大業三年の佛畫に就て(混沌生、同誌)は令狐拙術なる者の筆に係る二百葉中の二片が我邦に傳はり何れも活字の銘文を有して我が因果經に通ずる點あるを見るべく、螺鈿平脫の「唐鏡背面の寶飾に就いて」(原田淑人、同誌)巴里圖書館所藏の波斯コスロウ二世の玻璃盃と相通するを謂ふ。「敦煌の千佛洞」(羽田亨、佛教美術)も亦

有益なものである。現時の支那音階と其の進化(田邊尚雄、東洋學藝雜誌)は宋以後新生せし近代國民樂中の宋樂は唐の燕樂律を踏襲し元に入りて洋式の長音階式のもの加はり半音の使用の増加したることを唱へ「支那の雅樂と俗樂」(同人、國學院雜誌)につき宗人府にて研究練習せる明朝雅樂の水調歌頭以下十四曲短評、九雲鑑以下十八種の樂器を解説し聽く所の出水連以下五曲を評し蛇味線の調子、孔廟の聖樂福建の御前清曲に及んで居る。

又西域系陶磁の釉藥を見るべきものに鉛硝子釉、曹達硝子釉あり之が素地胎土の進歩、吳越地方に還元焰の使用の起るに相俟ちて斯術の進歩したることを謂へるは「支那陶磁に表はれたる西域文化」(小村俊夫、東亞經濟研究)の研究である。史料に於ては「大英博物館所藏太平天國史料」(内藤虎次郎、史林)の旨准頒行詔書二十九種ゴルドン文書四十餘通を紹介解説し「回鶻譯本安慧の俱舍論實義疏」(羽田亨、東洋史論叢)は Seno 蒐集の該書分別界品第一の一の初より隨義別名に至る迄の譯及び釋の譯同一の二十本頌應善調伏心より意不定應知までの釋の譯分別根品第一の二の相應の義の釋の譯、分別業品第四の

六の四梵之福の釋の譯を列舉し安慧が Schramati して現はれて居ることを述べ其の一部分の邦譯を試み、これ一九〇〇年より一九〇七年までの間に王道士によりて添加封藏せられたるものならむと謂つて居る。華嚴經十廻向品以下大谷大學所藏の二十九卷の「敦煌發掘寫經の研究」(高柳恒榮、佛教研究)や、「老子化胡經の由来」(名畑應順、同誌)につき王浮が僞作の緣由を論じ化胡に對する老子爲佛說老子爲迦葉說迦葉爲老子說老子師佛說尹喜爲佛說老子妻爲佛說の諸說を批評せるも有益なる研究であり、「杜欒川年譜」(倉石武四郎、支那學)は杜牧の生死年を唐の德宗の貞元十九年生、宣宗の大中年五十歲病歿を確定したること、此の年譜が歴史の缺を補ふ功きは決して尠くない。其の外翟耆年の稽史等に基き四十七種の「宋代金石書目」(神田喜一郎、支那學)を佚存を明にして列舉したるもの、寧樂朝舊寫洛北神光院空心和尚舊藏の「舊鈔本南海寄歸內法傳跋」(同人、同誌)「晋寫本三國志吳志殘卷跋」(白堅、同誌)並に之を一通行本と校勘したる「晋寫本陳壽三國志殘卷校字記」(羅福成、同誌)もある。尙ほ「東洋歴史參考圖譜」も信憑

すべき寫眞を滿載して續々公刊せられ第七輯まで百五十餘葉に達した。最後に紀行に「山東の佛蹟を叙して道院に及ぶ」(常盤大定、宗教研究)もの、「四川峽中の江上氣分」(後藤朝太郎、東洋)の如く宜昌峽より巫山峽、夔府民船岷江の風物を叙したるもの、「滬上見聞」(那波利貞、歴史と地理)と題して上海の各藏書館、王靜安邸にて一覽したる杭州出土のアラビア文碑拓本、新疆發見回紇文碑拓本山東發見女眞文字碑拓本を紹介し上海支那書肆の現況滬上の名の解釋に及べるあり、「滿蒙及北支那雜記」(西山榮久、東亞經濟研究)は安東縣、四洮鐵路沿線、張家口に關する歴史の見聞記にして「燕吳載筆」(那波利貞)は讀書家の伴侶支那漫遊者の案内書として北京南京蘇州杭州地方の名勝史蹟の過去現狀を歴史の見地より詳述せしものである。〔那波〕

西洋史 昨年の收穫を年代順に擧げるに著書譯書には、「猶太民族史」(今泉眞幸著)は太古から希臘時代末期までのヘブライ民族史であつて舊約全書の記録を科學的に觀察し批評した著作であり「中古寺院法と經濟思想」(山口正太郎著)は寺院法と羅馬法との對立、寺院法に於ける

經濟思想の發展を論じ近古社會主義思想の萌芽は中世寺院法の中にあると論斷してゐる。「ダンテ帝政論、書翰集」(中山昌樹譯)は政治家ダンテの抱負、理想を披瀝した帝政論及彼の生活、心情を窺ひ得る書翰を忠實に譯出したもの。「十八世紀英國産業革命史論」(トインビー著、芝野十郎譯)は原著書が完全な體系を備へたものでないに拘はず近世英國産業史の重要な文獻の一に擧げられる所以は、原著者が能く新舊兩經濟學說を毫も偏見なしに討究し評論したといふ點にある、本書の如きが翻譯されたことは學界の爲に慶賀に堪へぬ。「世界大戰史」(原勝郎著)は主として大戰勃發前後の歐洲列強の外交關係を縱横に檢討論破したものの其觀察の精緻、卓越全く他の追隨を許さない、「世界革命之裡面」(包荒子著)は過度に恐怖され又は笑殺される「シオンの議定書」其の他現代猶太人問題を論究したものである。尙「西洋中世の文化」(大類伸著)は以前の著述「西洋時代史觀・中世」を著しく改訂倍加し舊著の面目を一新して中世文化の最高潮期を各部門に分ち詳細に論述した寧ろ新刊といふべきであらう。「世界文明史物語」(ルーン著、前田晁譯)は一種趣を異にし世界

史的人類發展の迹を通俗的に説明したものと一般社會の讀物として推奨したい。

雜誌の論文中、古代に關するものでは「始源期に於けるイスラエルの豫言者」(松井了稔、龍谷大學論叢)は豫言者其のものの起原を論じ、サムエルサウルの地位豫言者の群居生活感覺的興奮等を説き「イスラエルに於ける僧族の發生に就て」(同人・同誌)は祭司ミレビ人の關係、レビ人の起原、並にレビ人が祭司職を獨占するに至つたことを明にし「バビロニアに於ける世界統治思想に就て」(中原與茂九郎、歴史と地理)は紀元前三千年代バビロニアには明に世界統治の思想がありそして紀元前八世紀のイスラエル豫言者の同思想は宗教的アツシリアのは帝國主義的なるに對しバビロニアのは道德的哲人主義的なることを論證し「イエスの裁判」(瀧川幸辰、法學論叢)は福音書の記述を基礎としてイエスの裁判が當時の法律に照し適否如何を叙述したものと「新約全書に表はれたる政治思想」(島田久吉、史學)は專制政治の全盛期に生れた基督教は最徹底した民主主義者であつて、プラトーの理想國家、及希臘の民主々義も事實上上流のみの自由、民主を

目的としたに反し基督は社會的地位の高卑を問はず全く各個人の至高價値を力説したと説く。「坂口博士の世界に於ける希臘文明の潮流を讀む」(山谷省吾・思想)は博士の該著書を詳細に紹介し更に基督教の起原とヘレニズム文化の關係其の他二三の點に就きて疑義を叙べたものである。中世關係のものには「ローマ親族法の東方化」(栗生武夫・法學論叢)「ローマ婚姻法の東方化」(同人・同誌)がある、先羅馬固有の親族及家長の概念を明にし其の後基督教の影響の下に如何なる變化を生じたか殊に羅馬人の正しき性質の婚姻を解せずして其例證を挙げ其の後何故に離婚を禁ずるに至つたかを説き此等の法律はビザンチン帝國に於て完成し更に發展したことを叙述し「年市に就ての二三の考察」(竹林熊彦、歴史と地理)は賣買は古代中世に於て週期的時期に特設の市場或は年市で行はれ中世では市場よりも年市が特徴をなすとして年市と市場との相違、年市の概念及發達を述べ「ノルマン征服の前後」(同人、同誌)は八世紀から十一世紀までの英蘭の狀勢を説きノルマンの征服、之に對するアングロサクソンの對抗を觀察し、英蘭の文化の完成した過程を論じ終

りにノルマンディー公の英國侵入の事情、及其の歐羅巴史上の意義を叙してゐる。中世末期から近世初期に屬するものでは「チャプエの研究」(矢代幸雄、思想)は多く誤り傳へられてゐるチャプエの傳説的名聲を除き、其の本質として残る作品數種に就て彼の復興期藝術史上に於ける地位を決定したものは藝文は「ボツカチオ五百五十年記念號」を出して各方面から見たボツカチオの評論を載せ「トーマス・モーアの思想に就て」(朝日融溪、東亞の光)は奴隸なら全然民主的國家たるユートピアを紹介し批評してゐる「サン・ピエトロのシルエツト」(板垣應穂、思想)はサン・ピエトロ寺を親しく參拜して史的追想並に當年の名工巨匠の苦心を物語るもの、「聖フランシス・シャギエル出生の地」(木下太郎、改造)は上人出生の地カスチイヨ・ハビエルを訪問した記事並に其の懷古であり「ウルム市の藝術の衰微」(長壽吉、藝文)は同市の市勢一般の衰微から轉じて往日隆盛を誇つた同市の藝術殊に繪畫、音樂を論評し終りに同地方出身の音樂家シエラーの藝風を紹介したもので十七世紀以後になる「フランスに於ける君主專制思想の發展」(松平齊光、國家學會雜誌)は十四世紀から十七世

紀末までの佛國の政治思想を概觀し王權の神授説權力説慧智説契約説等を論述しそしてリシュリー時代が思想上專制の最高潮期だに結論してゐる「フーゴー、グロチウス」(市村光惠、法學論叢)はグロチウスの生立環境著述並に政治家としての活動、數奇な生涯を詳述したもの、之を相對して「グロチウスの自由海洋論」(立作太郎、國家學會雜誌)は彼が匿名で出版した「自由海洋論又は和蘭人の東印度貿易に關する權利」中の自由海洋論を詳細に紹介し且批評し元來海洋閉鎖論及其反對論は中世に起原を有し海洋自由論は彼の創見さはいひ難いが現今國際法上の定論となつたのは彼の功績だに結んでゐる「英國内閣制度の進展」(占部百太郎、史學)は光榮革命以來英國々王は超責任の地位に立ち之に代つて宰相が全責任を負ふ、この制度はナルボールの時に確立し彼は近代的意義の最初の宰相であるとし、こゝにいたるまでの沿革を説き「一七六三年の巴里條約について」(野村兼太郎、同誌)は該條約が英國の産業革命の機運を促し重商主義の没落し新しき貿易論の勃興を惹起したものと論結し「佛蘭西革命概論」(飯田忠純、歴史と地理)は大革命の内的動機と關聯

を辿りながら其の過程を概観したものの「近世英國關稅政策の回顧」(島田靜夫、外交時報)は十七世紀以降英國の關稅政策を論じ英國も以前からの自由貿易國ではないことを論證してゐるが之に關聯して「國際利益鬭爭の產物としての海洋自由論の原則」(横田喜三郎、同誌)は西、葡兩國の海洋閉鎖に對し「グロチウスが海洋の自由を提唱してから英國も從來の態度を改め自由論を探るにいたつたのは國民的利害に立脚したもの」を主張してゐる。「産業革命に就て」(匹田直、歴史と地理)は英國の産業革命の道程之に伴ふ諸種の社會問題社會主義の發生等を平明に叙述し「シモンド・ド・シスモンデーの社會思想」(久保田明光、中央公論)は英國のオウエンに比すべき彼の生立環境著述學説を説いたもの「農政より見たる家産制度」(八木芳之助經濟論叢)及「歐洲に於ける家産運動及家産制度」(同人、同誌)は家産制度の概念を明にし、この制度が米國で採用された事情、各州に於ける其の沿革、並に歐洲に輸入されて最近五十年間、獨、佛等の諸國に如何なる影響を與へたかを叙述し「一八五九年戰役開始前の佛蘭西ミサルヂニア」(齋藤清太郎、史學雜誌)はプロム

ビエールに於けるナポレオン、カヴールの會見以來兩雄が列強との外交關係を顧慮し開戰の理由時機等に苦心し特に英、普二國の中立を熱望し之が爲に慎重綿密な方法を講じたことを説き「ビスマルクとシレスキツヒ・ホルンタイン問題」(菅原憲、歴史と地理)は該二州問題の對策に於てビスマルクの卓越した識見手腕を叙べ、「ビスマルクの信仰と文化鬭爭」(時野谷常三郎、史林)はビスマルクが自然神教から神學的、新教的信仰に轉じ遂に基督の神を信するにいたつたが但彼は國權を維持し國家の福利を増進するが神意に適ふ所以を信じ之が爲には新教舊教孰れを敵とするも敢て辭せず彼の對宗教政策はこの見地に基づくものとし「東方問題の渦中に立てる二大政治家」(立作太郎、外交時報)はデイスレリミソールズベリの外交家としての比較論で晩近世に出た資料に據つて後者が遙に前者に優る理由を述べたもの「民族思想發生史論」(塚本毅、同誌)は文藝復興以來の民族思想を瞥見し、十九世紀の民族運動を論じ最後に世界大戰を民族解放戰と見「ユゴースラヴィアの歴史及地理的觀察」(長瀬鳳輔、同誌)は佛國革命以後該國土に國民的覺醒起り爾來之を況

ラスヅ主義並に周圍の諸國との關係を説明し「賠償問題の研究」(圓地與四松・同誌)及「獨逸國賠償支拂問題の回顧」(佐々木勝太郎、同誌)は大戦後の賠償問題を論究したものの「最近外交秘密文書公表の外交史研究に對する影響」(立作太郎、史學雜誌)は露獨填革命以來外交秘密文書發表の目的を分類解釋し從來明確でなかつた一八八一年の三帝同盟以下數次の秘密條約が略推定さるゝにいたつたことを述べてゐる。尙外交時報が五百號記念號に「世界島嶼」を題して英米佛獨露諸國の現状を説明してゐる外に東方問題モロッコ問題人種問題ロカルノ條約に關する問題等を取扱つた論文は頗多い。〔菅原〕

考古學界

遺物遺蹟を立脚とする考古學的調査は近時益々其の微に入るに共他方また綜合的見解に立つもの、著しいことを注視せねばならぬ。斯かる機運を促進せしめたるもの大正初年より擡頭せる堅實なる本邦石器時代の究明朝鮮半島史蹟調査の齎らせる業績に負ふべきもの云はれよう。昨大正十四年を顧みるに益々其の感を深うする

ものがある。石器時代人骨の發見は漸く其の數を減じたが尙ほ隨所に散在を傳へ「陸前大洞貝塚」(長谷部言人、人類學雜誌)にて八體を「相模子安池谷貝塚」(移川子之藏、橋本増吉、史學)にて一體「三河保美貝塚」(宮坂光次、人類學雜誌)九體「肥前國有喜貝塚」(濱田、島田、小牧、同誌)の三體等を主要とされる。有喜貝塚では人骨の外二個の箱式石槨人骨に共存する鐵鏃等の發見あつて此等遺物の示現する新事實は「吾が石金兩時代の過渡期の研究」(濱田耕作、民族)に重要な使命を齎らしめた。人骨にこれに附帶するもの、研究として「蹲葬の起原」(長谷部言人、考古學雜誌)「津雲貝塚人の抜齒風習」(宮本博人、人類學雜誌)は其の青春期に多きを告げ、「石器時代の野豬」(長谷部言人、同誌)「石器時代の馬に關して」(同人、同誌)「現代日本人骨の人類學的研究」(宮本博人、同誌)「人類學上より見たる日本民族」(松村瞭、同誌)等の現代日本人を對象として論及するものがある。次で遺物遺蹟を紹介するものに前述の人骨共存のもの、外本邦北部より通觀するに「北海道の環狀石籬」(宮坂光次、考古學雜誌)として特殊なるものを擧げ「奥羽地方」(岩手縣南部の

遺跡」大山栢、八幡一郎、人類學雜誌」磐城小川貝塚發見の骨角器」(八幡一郎、同誌)「陸前宮城郡多賀城村園貝塚發見の土器底に壓痕する稻實」(山内清男、同誌)は興味ある資料とすべく關東地方に向つては相模國中郡葛田貝殻坂遺跡」(山崎直方等、同誌)は貝塚土器に地方的錯綜を標示し「上總守谷洞窟に於ける史前時代の遺跡」(山崎直方、同誌)は同地方洞窟の地質學的變化によつて生ずるもの、史前遺跡と結合し裏日本の大境洞窟と共に一般遺跡と異なる地形に立つものとして注意される。武藏東部低地に存する石器時代遺物」(大里雄吉、歴史地理)「武藏檜樹郡箕輪貝塚發掘報告」(谷川磐雄、考古學雜誌)等見るべく中部地方に入つては三河保美貝塚(前出)附近の寶飯郡小坂井村に一個の骨骨を出すあり此地は銅鐸三個を出せる地點であつて「三河新發見の銅鐸」(喜田貞吉、歴史地理)「同郡松間發見銅鐸調査報告」(梅原末治、歴史地理)「同村發見の銅鐸」(森本六爾、後藤守一、考古學雜誌)の諸報告を提示してゐる。近畿地方には「大和三輪山麓に繩紋土器の發見」(樋口清之、考古學雜誌)報じ「大和に於けるアイヌ的遺跡の新例」(谷川磐雄同誌)として

高市郡新澤一、磯城郡耳成村新賀附近等を追加し僅少な近畿の史前遺跡に重圈を與へるものである「考古學上及美術史上より觀たる大阪地方」(濱田耕作、大阪文化史)は吾が工業都市として本邦唯一の發展の途にある大阪平野の古代より説述し「有史以前の近江」(島田貞彦、歴史地理)には該國に於ける史前遺跡主として近時發見に係る繩紋系統の遺物遺跡を詳述し從來繩紋系統の存在を知らなかつた此地方を究明するもの中國地方にて山陰方面は「出雲派の神々とその文化」(島居龍藏、國學院雜誌)と題し、氏の所論を告げるもの、外は局所的報告に接するものがない。山陽方面として「廣島附近の貝塚」(吉野温、考古學、雜誌)何れも彌生式土器よりの構成を報じ周防國吉敷郡見能ヶ濱遺跡」(島田貞彦、考古學雜誌)から特に繩紋土器の發見を記し僅少な出土量なれど備後以西北九州に互るの地域に此種系統土器の存在を確證せしめたことを特記せねばならぬ。更らに南下し九州に入るに「肥前國北高來郡有喜村貝塚」(前出)の發見遺物は史前と直後を連鎖する重要なもの、外特に該貝塚發見土器は從來發表せられてゐる九州南半の諸遺跡のものに彼

此脈絡を示現し最も興味ある史前土器研究に寄與するものに云へる。「肥前國嬉野石器時代遺跡」(島田貞彦、人類學雜誌)の石器特に黒曜石を原料とする石鏃に其の手法の特異なものを舉げてゐる。以上は主要なる遺跡發表のものであるが個々の遺物を考證するものに「石匕に對する二三の考察」(中谷治宇二郎、人類學雜誌)「有角石斧」(谷川磐雄、同誌)等がある。概括的に本邦の當代を論述するものに「人類學上より見たる我が上代の文化」(鳥居龍藏)「有史以前の日本」(同人)「先史時代のアイヌ」我が祖先の先驅者(同人、史學雜誌)等は氏の持論を見るものである。雲根志の著者木内石亭(中川泉三、考古學雜誌)の吾が先史考古學の先覺者として其の人を紹介する處がある。石器時代の終末期から原史時代にかけての過渡期の遺物として銅鐸、銅銚、銅劍等の調査研究は年々其の進境を認め、「銅銚銅劍の研究」(高橋健自)は從來出土分布せるものを集成し、各方面から遺物を推究し古式は支那の直統をつぐ實用的利器なるこし新式なる退化式は祭祠的遺物と推論し西紀前二世紀前後より古墳盛行期に下るべきものとされてゐる。「熊本縣下に於ける銅銚銅

劍」(熊本縣史蹟報告第二冊)は又た前者と共に注目すべきものである。「播磨國佐用郡平松發見の銅劍」(島田貞彦、人類學雜誌)は近く一新例を加へたるもの銅鐸にては三河國寶飯郡發見の三個並存(前出)は出土状態の明瞭なることに於て特に注意すべきもの「播磨國佐用郡三日月村發見の銅鐸」(島田貞彦、考古學雜誌)に關する資料は發見史を補ふもの「銅鐸の化學成分に就いて」(梅原末治、東洋史論叢)氏の銅鐸考の前驅と見るべきもので即ち三類五小型に分ち近重博士に據る十八例の分析によつては、同形式のものが同一合錫量を以てすることに明にし其の古式に合錫の多きは大同江面發見の漢器分析の同様な錫なるに據り其の原料を支那古銅器の改鑄による持説を確め、「遺物より見たる上代の鑄造術」(香取秀眞、考古學雜誌)に現代の鑄造法である生、惣、蠟の各型より推して惣型を最も古くこし銅鐸其他に就いてこの特殊な鑄造を述べ一般鑄造に概念を與へるものである。「筑前國朝倉郡福田村栗山發見の甕棺内遺物」(中山平次郎、同誌)は北九州に於ける金石並用期の一特質をなすもの即ち單獨甕棺内に二十二個の貝輪を包藏し、人骨の痕跡を明に

し蓋ふに石板を以てしてゐる。又た同所發見の他の一甕にはクリス形鐵劍の存在を傳へてゐる。扱て原史時代に入るに古墳及び其の關係遺物を叙するものに「陸奥國增田經ノ塚古墳發見の櫛」(長谷部言人、人類學、雜誌)を詳記し櫛の發達として細串を結合する結束式を扁平なる板を挽き齒を作る切襖式の二類に分ち各例を示すものがある。「下野國の前方後圓墳」(丸山瓦全、考古學雜誌)の三十例「遠江國寺谷鏡子塚古墳調査報告」(西郷藤八、同誌)には銅鏃、巴形銅器の發見を傳へ、「大和國佐味田發見埴輪土偶」(高橋健自、同誌)は其の着裝状態により袈裟式を名け多くの土偶着裝が頭衣式なるに比して此地のものが古式の型式を帶ぶるものであることを以てしてゐる。「近江國坂田郡能登瀬の古墳」(島田貞彦、歴史と地理)から直弧紋の附されてゐる鹿角製小刀子の出現を告げ「出雲八束郡吉江村發見の「裝飾付石棺」(野津左馬之助考古學雜誌)は組合箱式棺の蓋上に幾何學的線刻の新例を報じてゐる。九州に入つては「石人」其の表飾の古墳」主要なる古墳(熊本縣史蹟報告)中に前者には熊本市池田町、鹿本菊地、玉名各郡下所在の石人、其の年代を性質

を述べ埴輪土偶を全然同一の性質なるを明にし後者には熊本市北岡神社、菊地郡久米の石棺、上益城郡小坂の大塚古墳、宇土郡檜崎、玉名郡繁根本の各古墳を擧げてゐる。「二三の埴輪」一古墳に關する新資料(森本六爾、考古學雜誌)として大和國添上郡帶解村發見の埴輪破片に動物型の線刻あるものは注意さるべく同國北葛城郡佐味田寶塚古墳の前方部に存する石室から一般前方後圓墳の構成に及ぶものがある。「上代墳墓の營造に關する一考察」(梅原末治、藝文)として前方後圓墳の起原發達を論じ其の生前土工に係るもの、可能性あるを告げてゐる。古墳人骨の計測として「近江國滋賀郡苗鹿古墳、攝津國神戸市板宿得能山古墳」越中國磯波郡成山古墳、宮本傳人、人類學雜誌)及び「熊本市春日町北岡神社古墳出土人骨」(清野謙次、熊本縣史蹟調査報告)等を數へる。此等は將來吾が古代人種を決定する上に重要な地歩を占めるものであらう。「車輪石、鍬形石及び、石劍の研究附具器の青銅化」(高橋健自、考古學雜誌)は古墳發見遺物の特殊なる石製品に就て論及するものであつて特に明器的のものでない題目のものに觸れ具輪からの發達を述べ石製とし

て盛行したことは宛かも曲玉が最初獸牙佩用から案出され玉石に代はりしと同一の道程であるを結んでゐる。『本邦古代の狀態に對する考古學的研究』(梅原未治、史學雜誌)、「耶馬臺國問題」(橋本增吉、同誌)とは互に其の立脚する所を告ぐるものがある。各府縣の史蹟調査は原史時代を中心として其の前後に及び昨年出版されしものに東京府、(同府第三冊)島根縣(同縣史四)京都府(同府第六冊)兵庫縣(同縣第二輯)長野縣(同縣第三、四冊)福岡縣(同縣第一輯)熊本縣(前出)奈良縣(同縣第八回)宮崎縣(同縣第四輯)等を挙げられる。

古墳關係以外の寺趾、石佛、窯跡等は前記各縣調査報告中、京都市法勝寺遺址、紀伊郡安樂壽院、(京都府)東京府御嶽神社、等(東京府)宮崎縣兒湯郡國分寺址(宮崎縣)等の外、「法隆堂塔の基壇に使用せられたる凝灰岩様石材」(關野貞、考古學雜誌)は全く人造石に非ずして、大和國當麻附近産出のもので大和附近に散在する寺址、石塔、宮殿基壇、礎石乃至古墳石棺、石室の同石のものを例示されてゐる。伊勢立野の瓦窯趾(大西源一、同誌)から奈良朝時代の古瓦を發見するものであつて同地方現

時の瓦窯の詳細を述べ彼此比較する處がある。『美努連岡萬の墳墓』(田村吉永、森本六爾、同誌)『美濃に於ける仙人彈琴境出土の一古墳』(森本六爾、同誌)は共に古墳末期に築成せられた墳墓であつて前者は地下に主體を置き小封土を以て標識とし墓版を埋め後者は横口式古墳に屬することを叙してある。「伊勢立野發見の土塔及び經塚遺物」(大西源一、同誌)「近江栗太郎石居廢寺」(島田貞彦、歴史と地理)「宗像神社の阿彌陀經石の研究」(西岡虎之助、歴史地理)「四天王寺建築論」(長谷川輝雄、建築雜誌)「法隆寺東院創立當時の計劃」(同人同誌)等の外、佛像關係では「百濟觀音像」(濟田耕作、佛教美術)「豊後高田の畫像石」(同人、同誌)及び「豊後磨崖石佛の研究」(濱田耕作、京都帝國大學考古學研究報告第九冊)等注意すべく就中後者は從來本邦の石造彫刻として閑却せられてあつた此種のを挙げ、即ち豊後國大分市、大分郡、大野郡、臼杵町深田等に點在する石佛を詳叙し後論として石佛造像の特質、作者と時代、様式觀、支那朝鮮の石佛との關係、製作的基礎等を論じ「單に豊後一國の石佛研究に止るなく本邦各地所在の秀拔なるものを論考することに於て

日本彫刻史の一缺陷を充補するもの云つてよい。考古學的調査が斯かる造形美術の研究に如何に意義あるかを表示する第一歩として是認さるゝものであらう。玉蟲翹

飾考(濱田耕作、東洋史論叢)は朝鮮慶州金冠塚發見遺物中の該蟲翹を使用せるもの、法隆寺玉蟲厨子を主題として各種方面より論述し文獻ニ昆蟲學上より支那朝鮮に發生するもの少いに關はず金冠塚等の遺物に見るのは恐らく本邦から流出するものであつて此等遺物の製作さる、西曆六世紀前後には日鮮の文化的交渉が甚大であつて支那本土の文化は半島を經由することなく寧ろ直接に本邦に輸入されたことを裏書きせしむる一つである。宮城二重橋を種々の方面から論據立てられてゐる。宮城二重橋下發見の人骨は好奇的視聽を集めたものであつて或は墓地に云ひ人柱に云ひ其の確證を與へるものがないが墓地説を主張するもの(和田軍一、歴史地理)は同地發見の火葬場址發見の土器に土葬人骨共存のそれと一致することをも以てしてゐる。土俗的方面の調査は近時その重要さを加へ、海南小記(柳田國男)は琉球地方のそれを、安南地方のモイの葬式(坪井九馬三、考古學雜誌)南洋蠻

族間に見らるゝ一種の龍文様(移川子之藏、同誌)等を舉げられる。

更らに朝鮮半島に轉じて見るに同半島の遺物遺跡の研究は日支の連鎖線上に立ち東亞古代文化の仲界をなすものと云へる。即ち同總督府の史蹟調査事業の齎したものであつて北鮮南鮮共に着々其の資料を提供してゐることは數年來の同總督府の調査報告によつて窺知することが出来る。北鮮の大同江面遺跡調査は大正五年以降注視せられ、次で所謂樂浪郡治の地なりとさるゝ土城里附近に點綴する千數百基中の古墳はしばしば盜掘行はれ重要な資料を發見するものあると共に又た數次の學術的調査の結果のものに相待つて重要な一地方をなすものとされてゐるが昨秋東京帝國大學文學部はこの土城の南方十二町の處に存する南北古墳を發掘し、北墳から完全なる木槨に漆器、木印、陶器其他多數の共存遺物を發見し世の視聽をそばたしめたものがあつた。近き將來その精細な報告に接するものであらう。他方此間に處して北鮮發見の古鏡(梅原未治、東洋學報及鑑鏡の研究)に居甌、始元、元始、永光等の前漢銘あるもの、漆器銘文(内藤虎

次郎、藝文)は最近發見に係るものまでも判讀し、北鮮に於ける漢の郡縣存在の統治を實在せしむるもの云へる。一方南鮮に於ては前年度の慶州金冠塚遺寶に次ぐ新報告なければども「漢代の遺蹟」(同總督府十一年報告)は新羅統一以前の永川琴湖面、慶州都外入室里、銅鉾銅劍等を叙し從來閑却せられありし當代のものを連綴する處がある。「朝鮮三國時代に於ける唯一の金銅佛」(黒坂勝美、考古學雜誌)として忠州附近發見の建興五年歲在丙辰云々の佛像を紹介さるゝものがある。又た「天平彫刻と新羅彫刻」(濱田耕作、佛教美術)「玉蟲翹飾考」(前出)などいづれも本邦と密接なる關係を説いてゐるものである。

支那方面の主要なるものに「支那の石器時代」(石田幹之助)「甘肅の彩繪土器」(濱田耕作、民族)等は史前文化を語るものである。支那の考古學的調査は近時頗る長足の發展を見北京農商部地質調査所は此等に關する甘肅考古記、洛氏中國伊爾卷金石譯證等の考古學的報告さへ提供してゐる。甘肅發見の土器は近時、本邦に將來されたるものゝ中最も重要なものであつて、該土器出現に就て原支那人が新石器時代に土耳其斯坦から支那西境に移動し

それが河南其他に入つて所産されしとするもの支那人は古くから居住し三代土器等を製作する期に西方から彩陶文化を有する民族の流入の爲し或は民族の流入よりも單に西方文化の影響によるものとする等の各説がある何れにしても將來支那の史前文化を究明するものゝ、第一歩とされる。漢代遺物には「漢畫像石類の形像ある明器」(濱田耕作、考古學雜誌)に車馬飾板付綠釉明器を紹介し畫象石と同一題目に出たものであることを告げ「漢碑の様式」(市村瓊次郎、東洋學報)は玉器として使用されてある琕圭、瑛圭等の形式から生成されしものと推し種々の文獻と共に考證するものがある。「雷紋地鳳凰鏡」(廣瀨都異、考古學雜誌)の河南省衛縣から出土せられ支那古銅器紋様のそれと類し手法の最古式なるを紹介するものがある。「刀布の形式と其の起原」(入用整三、同誌)支那古錢形狀の起原(塚本靖、同誌)等の古錢に關するものあつて後者は貨幣として通用さるゝには物々交換時代の主要なる物資のものが象られ或は天然物即ち貝殻等を摸せしもの即ち布は鋤、刀は刀物、磬幣は磬、圓形圓孔は璧を象れりとされてゐる。唐代遺物には「支那古明器泥象

圖説〔濱田耕作あつて〕明器泥象の起原を論じ更に漢、六朝及唐の三期に分つて各期の様式、手法、種類等を細別し圖例を相待つて明器泥象の因由を盡くせるものと云へる。

以上、口支鮮の三國に互り其の石器時代より歴史時代に及ぶ考古學的範圍のものを舉げたるも尙ほ幾多の主要なる論述を割愛するの餘儀なきものあることを遺憾とせねばならぬ。日支鮮三國を通じ去歳の斯界は益々進境するものがあり就中、支那の石器時代、北鮮の古墳、本邦石金兩時代等の究明は特に東亞文明の終局に向つて歩を移すものと云へる。東亞の先史考古學研究は必然的に西歐のそれに刺激を受けるものあらねばならぬ。「歐米見聞記」(大山柏、人類學雜誌)「東亞の史前を讀みて」(同人、同誌)「南部英蘭發見始原的石錐」(松本彦七郎、考古學雜誌)「ドルドイニユの有史以前の遺蹟」(鳥居龍雄、同誌)「原始人類の研究」(下田禮佐、歴史と地理)等は邦人の見聞にかゝるもの、斷片と見るべきもの將來東亞の先史考古學の發展につれ西歐舊石器時代のそれと彼此相關聯するもの、あることは必しも假空ではなからう。而かも先

史考古學の研究範圍は其の原史時代に比し分野の頗る廣大なるものであることは云ふ迄もない。東亞の一角に立つ吾が日本の遺物遺跡は今や日支鮮のそれと相離る可らざる環境に支配せらるゝことを具體化せる今日、尙ほ一步を進めて西歐其他と聯絡を見んむするは斯界の前途は益々多幸と云ふべきであらう。(島田)

地理學界

一昨年初頭京都帝國大學文學部地理學研究室同地理學部地質學教室より「地球」が創刊せられて本邦地理學界は異常の活氣を呈したが昨年三月東京帝國大學地理學部地理學教室より「地理學評論發刊せらるるに至つて斯界は更に一段の緊張味を加へ東西相應じて傾聽すべき卓説の發表せられたるもの少くない。今此等兩誌其他の専門雜誌著書報文等により本邦昨年の地理學界を概觀するに自然地理方面に於て地體の構造、地盤の運動に關して「房總半島東南部に於ける傾斜地塊に就きて」(山崎直方、地理學評論)は房總半島東南部は鮮新时期に於て大部海に被はれたるが後隆起して地表に顯はるる際、地塊運動により幾

多の傾斜地塊となり後斜面を内地に向け此處に河流の長大なるもの發達せるが隆起は尙其後に至るまで繼續すこなせるもの「皺曲區ミブロック區の假定及び區劃」(徳田貞一、同誌)は歐亞大陸地向斜區域は皺曲作用最も盛んなりし廣義の皺曲區、印度亞利比亞亞弗利加大地塊はブロック區に類する一區域と見做すべく日本群島内に於て常盤釧路の第三紀層は之をブロック區内に釧路川口以北は皺曲區内に容るべく相模灘海底ブロックは今時大震に於て尙ブロック運動を繼續せるもの、其運動は敷島隆起時代に始まるに反し三浦房總第三紀層皺曲は其れより古き運動に因るもの北海道九州臺灣樺太の油田炭田にも皺曲群あり東北より新潟に連る裏日本一帯には著しき皺曲群あり遼州相良の背斜は太平洋側に異彩を放つ、ブロック運動は瑞穂沈降時代終末期及び敷島隆起時代中成田層生成後の二回に來れるもの、常盤釧路のブロック地方に於ては地盤の垂直運動を實證するも新生代を通じ皺曲を受けたる事少き事實より此等地方は近世代に於いて他地方の皺曲運動盛なりし時代主としてブロック運動のみ惹起したるか、皺曲運動を粘軟なる岩質區に、ブロック運

動を脆弱なる地質區に收めんとするミードの考へは皺曲圍が北樺太より越後に至る長大なる區域に亘るの事實ミ矛盾す、釧路ブロック區阿寒皺曲區の如く相接する區内に於て岩質にかゝる大なる差異ありと思はれず、モレングラーフ説にてはブロック運動は地下深所の皺曲運動なりとするも知床阿寒浦幌地方には背斜軸に沿ひ火山岩噴出せるより見て皺曲は淺所の變動にあらず深所の皺曲地表に於いてブロックミなるにはあらず本邦に於ては内帯壓縮せられて皺曲を生じ外帯張力を受けてブロックをなせるが如しミなせるもの「壓縮ブロックミ展張ブロック」(同人、同誌)は關東大震により各地に生ぜる同心的裂罅又は斷層は之を其の發生位置より考へ不安定斜面が激震を受けての生成にして、房總三浦釧路等に見る彎曲斷層カムチャツカ東岸土佐灣附近の弧狀灣入等も類似の位置及び形態を示す、側壓の場合にも前方低地高地の論なく山彎又は皺曲軸に平行する弧狀斷層を作る、中央日本西北性斷層本邦油田炭田地方走向斷層も其の類型と見る可しミなせるもの「火山脈ミ山體裂線ミに就いて」(藤原咲平、同誌)は我國著明の火山脈は雁行性を有す、雁行脈

は地塊運動の境界線不連続線をなし雁行各節はその歪み割れに、火山噴出部は壓縮部に相當す、歪み割れ方向より見太平洋側には東、東北又は北より西、南西又は南に向ふ歪力、日本海東海側には之と逆なる歪力を受く、不連続線は津輕海峽信越境上温泉大屯兩火山附近に於て渦形をなし信越境上のもは收歛性津輕海峽のもは發散性九州のもは東部收歛性西部發散性なる如し、津輕海峽石狩平野等は陸地分離により生ぜる低地、北海道脊稜山脈は北上川東方山塊の連續が太平洋縁部の向東南横すれと脊稜山塊の抵抗の爲分離したるもの、羊蹄渡島兩火山群恐火山の不規則的配列は渦卷頂點附近の火山群生と分離断片の廻轉に基く、北上常盤兩山塊は共に太平洋式横つれを受くるも二單元に分る、を以て不連続線那須火山脈は南北に分たる、其の分離部は又一の小渦卷となり渦卷の親子現象を呈す、地渦は二本又は三本の不連続線を出し其の接近部には脈をなさざる羊蹄毛無九州大屯等の火山群あり、乗鞍火山脈は富士帯に伴生せる、渦卷現象に見る反對廻轉の一線なり、太平洋側は一般に張力日本海側は壓縮區なれども大渦卷附近に於ては必ずし

も然らず壓縮區には火山發生し易く張力區には發生し難く太平洋側は張力の爲地塊裂開したる狀見ゆせざるもの「地渦と地裂線とに就て」(同人、地理教育)は地塊が長年月中に移動する以上渦卷を生ぜざる理なし地は空氣又は水より摩擦力大なるを以て地渦は盛に起る可く削割せらるる陸塊底には可動物質洋底より集まりかくて生ずる地底渦卷は頂部陸塊に運動を分與す、地渦の場合には地盤盤き爲皺曲又は斷層を伴ふ、斷層は張り裂け機歪み縮み水尾弱線割れ等に別つべく、皺曲は水平壓力又は歪力に伴ふ壓力に由りても生ず、アルプスヒマラヤセルベス附近に大渦卷の標本あり、環太平洋地震帯に伴ふ火山帯は渦卷と雁行脈との鏈より成る、尙ロシア平原にも渦卷形顯はる、之は水平に重る廣面積地層中に僅かなる振力作用し渦卷形に隆起部と沈降部と生じ隆起部は削割を受け深き地層を、沈降部は新地層のみ現はせるものとなせるもの「諏訪盆地の地質構造に關する知識」(本間不二男、地球)は諏訪盆地は傾倚地塊による窪地にあらず小規模の地溝なり、生成時期は現在のホーマート型或はコニード型火山が富士火山帯に生ぜる直前となせるもの、火山現

象に關して「丹波田倉山火山の地質」(上治寅次郎、地球)は田倉山火山活動は牧川谿谷より東河川谿谷に及ぶ裂縫噴出に初まり田倉山中央噴出によつて終局を告けたるもの、其の活動の洪積世にも存したるは水坂附近の湖水堆積層により推知し得、田倉山四近の地は中生代末又は新生代初期基準平原なりしが床尾山附近より南東に向ふ緩慢隆起帯生じ因成流は西南流せる後火山作用は立武岩を流し夜久野並に田倉山を形成し四周に一時的湖沼を現出せしめ其中東河川は田倉山西方に水坂湖は中生層礫岩間を流れ段丘ミ湖水堆積層ミを残して消滅せりミなせるもの「寛政四年温泉岳前山の山崩説を駁す」(佐藤傳藏、同誌)は寛政四年温泉火山前山が爆裂せるは其の特有の形狀を呈する爆裂火口、爆裂作用に伴ふ流水山の存在に徴し地震動による崩壞の不可能なる事前山地質地形が大崩れを許さざる點、舊記が明かに火山性爆發の首尾を記し噴火の順序が全く普通なる點より見るも最も明瞭にして大森博士の説の如く山崩れせるにはあらずミなせるもの「所謂阿蘇熔岩に就て」(松本唯一、地理教育)は中部九州に於ける火山活動は總て恐らく第三紀末葉以後にし

て噴出期を大體五期に分つべく本州弧琉球弧の接合體が中部九州火山群山陰系瀬戸内系琉球系火山の會合點が大阿蘇なりミなせるもの地震に關して「但馬地震の震源」(山崎直方、地理學評論)は震源地津居山灣附近の丘陵は海岸に絶壁を作り數多の斷層により切斷せられ斷層間各地塊は傾斜偏倚し其の成層後地變甚だしかりしを物語る灣は陥落性灣入にして兩岸の地形は其の近き地質時代の成生なるを示せり、所謂田結斷層は舊斷層崖に平行して灣ミ同様西に轉落し過去に於ける塊裂作用の新しき活動を示せりミなせるもの「城崎地震に關する調査」(中村左衛門太郎、齋藤報恩會學術研究報告第一)は初動方向は震源北部に於ては東、南部に於ては西、地物の震動方向は區々なりしが初動方向ミ一致點を發見し得べく地質地形地震の強度間には密關係あり、泥土砂礫は通常固體の性質を呈するも運動開始後は殆んミ液體の性質を有する事經驗せられたり、噴水孔附近の地は必ず多少沈下せり田結の地割は第二次的のものなるも其の間多少の關係あり、葛野陥落は第二次的變化なるも爲めに久美濱灣北部に於て津浪を起せり、坑内に於ては震後湧水増加せりミ

なせるもの「地震波傳播の異常に就て」(寺田寅彦、地理學評論)は幾何學的に地震記録より定めたる震域面積の配置が簡單なる考へより豫期せらるゝものに比し甚だしく相違せる事實は地質の相違地震波反射屈折の影響にもよるも太平洋沿岸に於ける地塊の如きは連續せる彈性體ならず地塊の集合にして其の間接合堅固ならず各個獨立の搖動をなすが爲に假定する事も得こなせるもの地形に關して「但馬玄武洞附近の地形に就きて」(鈴木醇、地理學評論)は玄武洞附近の地が隆起して平均三百米の準平原となれる當時より岡山川は舊斷層線を流れたるが、其の後來日岳中腹噴出の玄武岩流は其の下流一帯を埋め一時上流を堰塞して湖水を湛へ、湖水は排口を舊岡山川筋に求め鎔岩塊を浸蝕二分せり、其の頃地盤沈降海水浸入し津居山灣等を形成し、後、小規模の隆起あり岡山川下流津居山灣沿岸の狹き平地陸上に現はれたりこなせるもの「多摩丘陵の地形」(淺井治平、同誌)は多摩丘陵は其の高度分布及び組成物質より見て三浦半島第三紀層岩上に倚肩し更に東北に廣まれる舊三角洲なるが東北部斷層に切斷せられ現狀を呈せりこなせるもの「トンポロミ

マール」(綿貫勇彦、同誌)は男鹿半島は二個のトンポロを有する複トンポロなり、其の成長を促せるは男鹿地塊ミ地塊及び河流の提供せる土砂にして男鹿の灰色細粒雄物の白色粗粒砂は各自系統を明かにせり、男鹿本陸間には連續小裂塊存し南トンポロの一部をなし漂流土砂の集積を誘へり、最初の洲は曲率最大に、外側後成洲は曲率小に、砂丘間低地には斷續せる細長の沼あり、北トンポロ成因は雄物川に能代川を置き換へたるもの、一目二日三目潟は火山の蒸氣爆發後に殘れるマールなりこなせるもの「準平原狀地貌の成因に關する諸説」(青木廉二郎、地理教育)は平坦地貌の成因に關しラムゼー説は之れを海蝕に、ボウエル説は河蝕並びに風化作用による見做せるが此の種地貌は又乾燥輪廻究極の形とも考へ得、但常總三浦四近懸崖の露出より想像さるゝ化石平坦面は本邦沿岸開析臺地と共に海蝕の產物、阿武隈北上關東中國の諸山地平頂は準平原の遺物ならんこなせるもの「東京山の手臺地及下町の地形的差異に就て」(清水三郎、地學雜誌)は山手臺地及下町の地形的差異に就きブラウンスは之れを水蝕、鈴木博士は海蝕によるこなせるも實は成

田層沈積中或は其れ以前より塩埤堆積後まで周期的に活動せる斷層に基因すこなせるもの「リヒトホーフエン男の長崎三角地域ニ平行山稜の密集群に就きて」(徳田貞一 地學雜誌)は分水嶺又は溪谷線の詳密なる追跡により平行山稜を研究し地形地質學上の重要な暗示を得べしこなせるもの、海岸に關して「博多灣の海岸線」(中山平次郎、地球)は博多灣に於ては元寇役防壘址の追求及び文献の研究により元寇以來汀線變化せるを推知し得、筑前國續風土記の研究及び早良郡姪濱に於ける波垂石の存在等によれば附近は最近地盤隆起せるもの、如きも大體に於て汀線變化は潮流の作用によるが如し、南岸に於て東西兩部間陸地増生に相違あるは堆積土砂分量の相違即ち主として河流の強弱に因す、砂嘴は潮流のため多く左廻し右側に入江を有し川口は右廻し突出部尖端は削割せられ潮流會合部は陸地三角狀に突出し海の中道の如きは生成後南遷の傾向あり、道切の斷絶は暴風ニ高潮ニに因るも眞因は砂州の細きにあり、此は交界岸流より見て志賀島下流側に存するによるこなせるもの「史前時代以來上總東南海岸の昇降に就きて」(山崎直方、同誌)は房總海

岸は地質時代以來地殼變動により昇降を繰返せり其の第三紀以後著しかりしは守谷辨天崎兩洞窟之れを證す、波浪は第三紀凝灰岩絶壁に洞窟を作り陸地隆起して洞窟は史前人類の住居ニなり陸地下降し海水洞内に浸入し再び隆起して人類生活を繼續せしめ、再降下し海水浸入したるも其の後著しく隆起して今日に及べり、其の最大隆起量三・六米隆起四回下降二回を算するを得こなせるもの「三浦半島の海岸に就きて」(青木廉二郎、同誌)は瑞穂時代終末期ブロック運動の結果三浦房總兩半島は連續せる一地塊として地表に隆起し北に古東京灣の出現を見たるが、其後の汀線變化は之れを今日海岸附近の地形地質の研究により追跡するを得、該ブロック運動に于與せるは三浦層及其れ以前の岩類當時の海底に沈積せるは東京成田宮田の諸介層なり、其後此等介層陸上に現はれ開析臺地を作り次に開析臺地沈水して溺谷を生じ凹部に沈積突部に海蝕地形及び海濱沈積を生じ此の中間期東京灣陥落常總湖沼地並びに三浦半島南北兩帶特異地貌を生ぜる地殼運動あり浦賀海峽又開通せり、其の後稻村崎材木座等の諸介層及び海蝕臺地並びに洞窟海面上十乃至四、五米

の高距を占め大震により更に一段の段階を加へたり、大震は三浦房總の如く數多の地塊に分れたる區域さへ癒合せる一單元として東北より南西に緩傾起せるを教も、此れより推せば三浦房總の如き一局部の均一隆起は地殻運動によりても生じ得べしとせざるもの「和歌山縣海岸の地形變化」(田口克敏、地理教育)は紀州海岸に於ては最近代に於いて地形の水平的變化あり垂直的變化は甚だ小なるが隆起の傾向有力に、安政大震に關しては南端に於て隆起、紀伊水道沿岸に於て低下せりとなせるもの「北樺太東海岸の地質及地形に就て」(内田涵二、千谷好之助、地學雜誌)は北樺太東海岸無數の潟湖は砂丘を隔て、數條に排列し西方丘陵臺地は北方に急南方に緩傾斜し解氷雪剝磨作用の差異に起因するを示し舊砂丘の數列は陸地上昇の證據をなすとなせるもの「支那杭州灣の潮津浪」(小倉伸吉、地理教育)は杭州灣は西するに従ひ幅狭く深度小潮の干満大となり浪の前面急斜し倒れて潮津浪となる、灣及び江の地形變化に基き津浪に強弱あり地形變化は泥の沈澱と潮流による泥の運搬に起因すとなせるものカルスト關係の論文として「秋吉臺の地史と地形と地下

水」(小澤儀明、地理學評論)は秋吉臺カルスト地形は準平原と密關係あり石灰岩は風化に對し抵抗素外強く節理多き角岩以上なるを以て準平原の面影を最もよく保存せり、準平原化以前秋吉臺の蒙れる地變は臺をして標式的カルスト地形を形成せしむるに都合よく臺全體はカルスト地形輪廻の壯年期より老年期に至る多くの地形を呈す臺地下水は位置山中にあり岩石に取巻かれ下部頁岩砂岩が石灰岩と共に皺曲して地下水飽和帶附近に存するため其の發達異常に不規則なるが流口より二區域に區分せらるるとなせるもの「中國準平原及びカルストと居住關係」(同人、地理教育)は中新期以前に形成せられたる中國準平原は大なる變化を受くる事なく現在に至れり準平原面影の最も著しく岡山廣島山口縣に於て認めらるゝは該地方に石灰岩發達しカルストは一段秀れたる臺地面を作るを以てなりとなせるもの其の他降水量と地下水に關して「長崎附近に於ける降水量と地下水」(福井薩男)は長崎附近に於て降水量の九分四は流水となり九分三は蒸發九分二のみ地下水となるは地表が緻密なる安山岩よりなり山勢又緩ならざるを以てなりとなせるもの「大臺ヶ原山登

山案内〔脇水鐵五郎、地理教育〕は名は案内なれども大臺原山塊が高原性地形を呈するは準平原の面影の残れるもの、之は殆んど水平に近き硬砂岩厚層の發達するを以てなり輝綠凝灰岩は最も樗丸材の成長に適せりみなせるを注意すべく、上記は何れも研究による新説として傾聽すべきものである。〔小牧〕

人文地理學の方面を概説するに當り先づ理論の方を見る。〔歴史地理學に關する私見〕〔小牧實繁歴史地理〕は地理的條件が人類の歴史の黎明以後自然的にいかん變化したか人類の生活活動がいかん其環境たる地理的條件を變化したか住民が地理的條件によつていかに左右されたかといふ三つの方面の綜合的統一的研究が歴史地理學である。論じ「地理學研究上に於ける史的觀察の分野」〔内田寬一、地理教育〕は地理學研究上に於ける史的觀察は第一に地理學の發達史であり地理事項の變遷て地人相關の變遷を知るための歴史地理學といふものゝあることを證し「自然的人類地理學の主要問題」〔佐々木彦一郎、地理學評論〕は地球上の氣候と人口密度との相互關係をのべて人類増加の將來を論じ「人種爭鬪の事實と地政學的

考察」〔飯本信之、地理學評論〕はアメリカ及アフリカに現に行はれてゐる人種排斥の狀を説き「國境の研究」〔下田禮佐、史林〕は國境の帶と線との別及國境に影響する自然の要素の外に人文要素のあることを論じ「ラッツェル以後」〔奥平武彦、民族〕はラッツェルの人文地理學研究上の業績を述べてヴィダルブラシの學風に及び「人文地理の教育と統計」〔大内武次、地理教育〕は人文地理研究に統計の用ひられ方をのべたものである。人口の研究に關して「大日本都市別人口密度圖」〔小野鐵次著〕はこの方面に於て特筆されるべきもので我國ではじめて完全に近い人口分布圖が出来たのであつて附録の近畿地方の町村別人口密度表のごときは著者の勞を多ししなければならぬ。朝鮮の人口研究〔善生永助、朝鮮印刷會社出版〕は綿密な朝鮮の人口研究であつて「朝鮮の人口と其分布」〔中村新太郎、地球〕は其分布圖が層形圖にしてある點に於て更に注目すべきものである。つぎに本年は太平洋方面の研究が多かつた、第一に「白人の濠州」〔山崎直方、地理學評論〕は濠州の發見と白人濠州の現狀をのべ、テラー教授は南緯二十度以北の地に有色人を植民さす必

要があるとの意見を有してゐるを論じ、「太平洋民族誌」(松岡靜雄)はメラネシア、ミクロネシア、ポリネシア三大群島の民族を紹介し併せて太平洋に關する歐人の著書目録を紹介し、「太平洋の國境觀」(佐藤弘、地理教育)は太平洋を日米兩國の國境として考察し、「太平洋島の巨石文化に就て」(鳥居龍藏、民族)はイースター島の石像石壁及マリアナ、カロリナ諸島の巨石の遺物について其分布を考察し、「北太平洋に於けるロシア人の探檢」(下田禮佐、歴史地理)はベーリング、スバンゲル、ウランゲル、クルーゼンステル等の探檢業蹟をのべ、「古代太平洋沿岸の植民」(日本海流について)(小牧實繁、地理教育)は黒潮によつて九州近畿沿海の民が、房總半島方面へ植民した跡のあることを論じたものである。居住地理に關し「中國準平原及びカルスト」(居住關係)(小澤儀明、地理教育)は岡山縣北半の石灰岩臺地の部落について考察したものは「北陸地方に於ける漁民の季節的移動」(小牧實繁、民族)は北陸砂丘地に於ける假小屋の季節的移動を説き、「古代四國の聚落に就て」(同人、地球)は和名抄の四國二百五十一郷の中、確實に今日に残つてゐるものを表示して古

代聚落が平野に集中されてゐることを證明し「年市に就ての二三の考察」(竹林熊彦、歴史地理)は地理的及歴史的に見た年市の場所の考察である。轉じて都市の研究を見るに「横濱の地理學的考察」(田中啓爾、地理學評論)は實にこの種の研究中尤も出色のもので横濱の地形と其歴史的發展を明にし「支那都邑の城廓と其起源」(那波利貞史林)は支那は古くから城廓の民で行國の民でないにて長安城を説き「支那の都市」(西田與四郎、地理學評論)は支那に二種の都市がある、支那固有の形態ある都市として北京新式の都市として上海及青島の形式を論じ「都市地理の研究」(西田與四郎、地理教材研究)は都市地理研究の概觀をのべ都市の個別的硏發達の見方を論じてゐる。「金澤市」(齋藤外二、地理教材研究)「仙臺市」(山本研三、同書)「岡崎市」(小林喜一、同書)「宮崎市」(山田喜藏、同書)「名古屋市の工業」(稻垣健太郎、同書)「若松港」(松島庄太郎、同書)「基隆港」(吉岡三郎、同書)などは即ちこの個別的硏究の好例で「震災直後に於ける東京市の交通」(田中薫、地理學評論)は、東京人が震災後著しく郊外に廣く移つた理由を論じ「大阪市の商業の勢力範圍」

山極二郎、地理學評論）は大阪市が關西の中心で東京の勢力範圍との中間地帯が魚津から野尻湖をへて新居に至る、日本アルプスの山地にあることを明にし「我國主要海港の海上分配圈について」〔富士徳次郎、地理學評論〕は同じく我國の重な海港の經濟的範圍を明にしたものである。つぎに地名研究がまた多くの學者の注意に上つた中にも「朝鮮地名の考説」〔中村新太郎、地球〕は地球の講話欄に於て發表された力作であらゆる朝鮮の地名の解説である「本邦各地に關する西洋名」〔高橋勝、歴史地理〕はジャバンミといふ國名を始めベスカドル、フォルモサ、リンスホーテン（トカラ群島）フリース（伊豆大島）クリル（千島）リアンクールなどの西洋名を極めて多く蒐集し解説したもので「星ヶ浦命名の由來」〔滿州地名考〕〔木戸忠太郎、地球〕は滿州の多くの地名のつけ方「星ヶ浦」命名した語の由來を記し「爐邊叢書」〔郷土研究社〕の中にも琉球あたりの地名人名に關する小冊子が出た。其他本年の業績で見逃すべからざるものに「刀劍の地理學的研究」〔小川琢治、地球〕近畿地方の鍛工業〔同人、同誌〕があるこの二は姉妹篇で日本刀劍の變遷と鍛刀工業の地理的

要因をのべ奥州舞草、月山、平泉等東北に發達した古代の鍛刀工業から大和鍛冶中國長舩鍛冶等の歴史の變遷の次第を明にしたもので「朝鮮の人文地理學的諸問題」〔小田内通敏、地理學評論及朝鮮〕は朝鮮の民族交流の關係をのべ現在朝鮮に於ける支那人日本人について其の分布を明にし「世界に於ける魔術の分布」〔夏見寛治、地球〕は魔術的世界的に類似してゐることを述べ「米國の貿易に就て」〔下田禮佐、地球〕は米國最近の貿易の發達をのべてある。猶又歴史地理の方面で「河源に就て」〔藤田元春、支那學〕は黄河々源論の因て生ずる所以を明にして積石崑崙の位置を定め河源探究の歴史をのべ「黃海の海岸」〔藤田元春、地球〕「元明の海運について」〔同、歴史と地理〕は揚子江及黄河のデルタの發達がいかに海運を害するか、元代の海道が明代に衰微した所以を地理學的に考察し「最近に於ける北陸海岸線の移動」〔小牧實繁、地球〕は北陸海岸後退の事實を明にし「日本海岸に於ける砂丘上の遺跡」〔梅原末治、地球〕も同じく海岸線の變化を述べてある「都市としての大阪の地理的價值」〔小川琢治、大阪文化史〕は大阪の聚落的發展の徑路と交通上の要點

としての大阪港の位置を明にして居る。最後に「吾が邦食糧問題に對する管見」(永井潛東洋學藝雜誌)は世界の人口密度に於て我國は第四位であるが耕地面積一平方哩の人口には日本は二五〇七人で世界第一である。米を常食とする國民の將來を論じてある、經濟地理學上から見ても傾聽すべき論文たるを失はぬ、其他經濟地理の方面で本年になつて通商公報が日刊になり在外領事館の有益なる調査資料を網羅掲載することとなり、其中には東阿弗利加事情印度事情露國最近の事情等特に我國經濟に密接な關係の研究資料が續々掲載せらるゝに至つたことを特記しなくてはならぬ、これは同じく外務省から出る「國際事情」と共に廣く現代地理を學ぶ人には尤も價值多い参考書であらう。〔藤田〕